
テイルズオブザワールド 漆黒の翼 ~悪人面と悪役~

oyakata

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブザワールド 漆黒の翼 〱 悪人面と悪役〱

【Nコード】

N1368X

【作者名】

oyakata

【あらすじ】

死んだキャラクターの魂がたどり着く異世界に迷い込んだ主人公。彼の前に現れる、テイルズ原作で死んで行ったキャラクターたち。この異世界は一体なんなのか。そして、死んだ彼らはこの異世界で何をするのか。

マイソロのようで一味違う、異世界での作品。

プロローグ - 漆黒の世界は明るい世界 - (前書き)

テイルズオブエクシリアをクリアした時にふと思いついた作品です。

プロローグ - 漆黒の世界は明るい世界 -

「……いいだろう……話してやろう……私が、何を、求めていたのかを」
「僕はお前のように図々しくて脳天気で馴れ馴れしい奴が……大嫌いだ。だから……後は任せた」

「リッド、大切な人を守れ。極光術は……そのためにあるんだ」

「別れは終わりではない。とこしえに想うことこそ、共にあるということなのだ」

「俺は、俺の手で死を選ぶ……！ フッフ……あーっはっはっは！
ぐおおあああッ……！！！」

「ひゃひゃ……ついで……だよ。ちゃんと、俺のクルシスの輝石こわせ……よ……」

「ミルハウスト……ずっと……あなたのこと……好きだっ……た……」

「……現実ほこんなものさ……ヴェイグ……」

「それを……貴様が……。なぜだ……！ セネ……ル……」

「ちよつと……手こずつたな……」

「……あばよ。ザ・グッバイ……」

「次は体も魔導器に変えてこよう。そうすりゃ、もつと楽しめる、
そうだろ、ユーリイ？ ひっひっひ、あーはははは……ぐっ！」

「生きる……ラムダ……」

「頼む……どうか我が国の未来を導いてくれ……」

「僕はここまでのようだ……この国のことを……頼みます。無理じゃないはずだ……あなたなら……」

無数の声、あるいは断末魔、あるいは悲鳴が木霊する空間。

声が終わると光が生まれ、彼方から此方へ去っていく。

その光が流れる際、淡い軌跡を残していく。それが無数に集まったとき、光の道が生まれた。

その道の上に、俺は立っていた。

「……あれ？」

「良く来たな。この”ヘル”と”現代”を繋ぐ回廊へ」

光の道の行く先に、ターバンを巻いたマントの男が現れる。

腰に巻いた赤い布がはためき、両腕に無数のリングが光を反射している。

「こ、ここは……？」

「この先は、幾層もの死の積み重ねより出でた地……ヘル。死んだ者がたどり着く、最後の世界だ……」

「い、いや、俺が聞きたいのは……」

「お前は死んだ。つまらないことだな」

「……え？」

唐突に言われたのに、妙に納得してしまう。

思い出せないのに、自分が死んだと言われると納得してしまう……奇妙な感覚。

これが死んだ感覚なのか……？

「輪廻を巡る力を蓄える事無く費えてしまったお前の魂は、これよりヘルへと送られる」

「そこで、俺は何を？」

「罪を償うも良し、己を貫くも良し」

「貴方は一体……？」

「私はエドワード・D・モリスン。私も、未練に囚われ死んだ男だ」

プロローグ - 漆黒の世界は明るい世界 -

馬車の中の木箱を持ち上げて、俺は裏路地の入り口に立った。

手綱を引くのは、長い金髪が特徴的な露出の多い服をまとった女性。

「しっかり務めるんだぞ。それで無くともバットは人相が悪いのだから」

「ひつでーなミラちゃん。俺ほど愛想の良い人間は居ないぜー？」

木箱を抱えたままくるっと一回転して白衣をなびかせてアピールする俺。

肩パッドが入り、燕尾服のように腰辺りで二つに分かれた服を、白衣と言うなら。

「では、私はこのままシルヴァラント支部に向かう」

「おー。俺はこれ届けたら徒歩で戻るわ」

「良いのか？ ここから支部までは……」

「わぁーわざわざ送ってもらうわけには行かんでしょ。元々、ミラちゃんの用事のついでに勝手に乗り込んだんだから」

「そうか。後、ちゃん付けは止めてくれないか」

「次会うまでに考えとくぜ」

「そうか。では、またな」

「おーう。まぁーたな」

走り去る馬車の音を聞きつつ、俺は木箱を抱えて軽快な足取りで路地を走る。

少し奥まで走ると、少し道が開けて木箱が積み上げられた空間に出

た。

この地区の配達物は、全てここに集めて置くように指定されているからだ。

その一番端っここに木箱を置き、俺は背伸びをした。

その時、木箱を積んだ場所の横にある扉が開き、中から30台後半の男が顔を出してきた。

「あ、どーもどーも!! 漆黒の翼でーす! お荷物をお届けに上がりました!」

「いつもすまないねバット。茶でも飲んでくかい?」

「いえいえ。お気持ちは、嬉しいのですが、自分、まだ、仕事なので!」

バット……つまり俺の名を呼んだのは、俺の所属する”漆黒の翼”の得意先のバーのマスター。

名前は確か、ビッツさんだ。仕事の話しかしたこと無いけれど、すげえ良い人。

「そうか、それは残念だ。仕事が終わったら、また来なさい」

「はい。ありがとうございます!」

顔を引っ込めて扉を締めるビッツさん。俺は扉を背にして、来た道を引き返す。

自分で言うのも何だが、今の対応は完璧だったんじゃないだろうか。誘ってくれたビッツさんを傷つけず、仕事の残っている俺が困ることも無い。

やはり俺にはこういう仕事に向いているんだな。

愛想良く、そして丁寧な言葉遣いを心がければ……

「あう、すみません」

「つとと」

考え事をしてたから、裏路地から出る所で小さな女の子とぶつかった。

女の子も慌てていたようだったが、こちらもよそ見をしていた。

反省反省……俺は女の子に謝ろうと腰を屈める。

と、女の子は突然恐怖に怯えた表情を浮かべて頭を抱えた。

「ご、ごめんなさい！ 怒らないで！ 怖い顔しないで！」

え？ いやいや、俺は笑顔で君の心配を……

「いやー！ 恐いよー！ 助けてー！」

と言うや否や、振り返って逃げ出してしまった。

待て待て。確かに俺はミラちゃんに”お前は目つきで人を殺せる”
と言うありがたい称号を頂いたけど、そこまで怯えるか……

「ちょ、ちよつとまつ……」

「それ以上近づくな」

慌てて女の子を追おうとした俺の目の前に、華奢な腕が現れた。

いつの間にかそこに居た金髪の男は、女の子にしがみ付かれながら
こちらを警戒する目つきを送っている。

「大丈夫か、アミィ」

「う、うん。ダオスさん」

「くっ……まだ何もしてないのに悪役扱いとは」

まだ何も、何もする気はないが。これだから見た目でモノを判断

する奴らは……

「あー、一応言っておくがー、イチャモンふっかけて何かぶんどる気は無いからなー」

これだけは言いたかった。

この悪人面のせいで、今まで散々理不尽な出来事に巻き込まれてきたからなあ。

何か弁解するのは無駄だと知っている。

俺はそう思っで、それ以上は二人を見ないように振り向いた。

そこに広がっているのは、一面の霧に包まれた街。

ここは”バルカ”と呼ばれる街で、常に霧がかかっているのが特徴だ。

街の中央には巨大な城が建っているが、誰かが建てたわけじゃないあの城も、この街も”最初からここにあった”ので、誰かが管理している訳ではない。

この街は、みんなの共有空間。ここでは誰もが自由なんだ。

「貴様ら！　そこを動くな！　逃げたら逮捕するぞ！」

「は？」

言った側から自由に似つかわしくない厳つい鎧を着た男共が続々登場。

何だこいつら。

「俺は騎士団のマルス！　貴様が今回の事件の首謀者か！」

「は、はい？」

男たちの先頭に立つ黒い鎧の男が、かなり強い口調でこちらに剣を向けてきた。

うわ、何これ。どこかのRPGの王道展開みたい。

「とぼけるな！ 貴様の背後の金髪の男が城からその少女を誘拐したのだ！ 貴様の指示か！？」

「ちょ、ちよつと待っ……」

何があだか分からないけれど、このままだと俺、殺されるかもしれない……

これもこの顔が招いた結果なのか。流石にこの理不尽は許容できないぞ。

「……こつちだ」

「え？」

突然、左手を引かれた。

掴んでいるのは、先程俺の目の前に突き出された華奢な腕。

ダオスと呼ばれていた男が、俺の手を引いてさっき俺の居た裏路地に入りこんだ。

路地の入口では、鎧が大きすぎて路地に入れないらしい間抜けなマルスが何か叫んでいる。

「お、おい！ 俺は何も悪いことしてない！ 追われてるのはお前だろ！」

「ダオスさんは何も悪いことしてない！ 私を助けてくれただけだもん！」

ダオスに抱きかかえられている女の子、アミイがこちらを向いて反論してきた。

そんな事を言っても、今俺の手を引くダオスはどう見ても盗賊か人さらいにしか見えない。

つと、俺も人を見た目で判断してるな……

けど、さっきの様子を見る限りではアミイは連れ去られたと言う風には見えない。

どちらが本当に悪いのかは分からないけれど、あの黒騎士に捕まった方が事態が悪化しそうなのは目に見えている。
仕方ねえ、とにかく安全な場所まで逃げねーと。

「こつちだぜ、ダオスさんよお」

「む？」

「安全な場所まで走るから、ちゃんとしてきてくれよ」
「了解した」

つづく

プロローグ - 漆黒の世界は明るい世界 - (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

これからじゃんじゃんキャラクターを出していくと思うので、お付き合いですませ。

ちなみに、今回出てきたキャラクターは

ミラ・マクスウェル

ビッツ・ハーシエル

アミイ・バークライト

ダオス

マルス・ウルドール

です。

……マルスさんの苗字ってさ……完全に操られること前提の名前だよね……

第一話 霧の王都で捕まえて（前書き）

サブタイトルが恋愛小説っぽくなってしまいましたが、中身はそんなことないです。

第一話 霧の王都で捕まえて

首都バル力は、無料で乗車可能なバル力鉄道と呼ばれる鉄道が走っている。

その鉄道の西門駅から真っ直ぐ進むと、右側に博物館がある。その博物館の正面左に見える、剣のシンボルが掲げられた店。そこに、俺達は逃げ込んでいた。

騎士団の追跡から逃れるために俺が選んだ場所であり、現実とは言えないまでもひとまず落ち着くには十分な場所。

現在は空き家なのだが、数週間前まではとある人物が商売をしていた。なので、目立った汚れや錆びれは無い。

「とりあえず、自己紹介しておこうぜ」

落ち着いた俺達は、とりあえず素性を確認することにした。

と言っても、この世界において本当の己を知る人間なんて居ないけど。

「俺あバット。最近は、漆黒の翼で情報員として活動してるんだ」

「私はアミイ。目が覚めたらお城の中で、騎士団って人達に閉じ込められてて……何か、”新しい道”とか言ってたけど」

「新しい道？」

「うん。あんまり覚えてないんだけど。それで、ずっと一人で部屋の中に居たら、突然扉が開いて、ダオスさんが来てくれたの」

「私もあの城に捕まっていた。それ以前の記憶が曖昧だが、状況の改善を計り脱出する際にアミイと出会った」

二人は脱出仲間って訳か。

話を聞く限り、ダオスはある騎士たちを退けて逃げるだけの實力は

あるみたいだけれど……そうは見えねえな。

この先、騎士団が襲ってきた場合でも戦闘になるのは避けた方が良さげだ。

「じゃあ、二人はどこ行く宛てがあるわけじゃないんだな？」

「……うん……何か、大切なことを忘れている気がするんだけど……」

「……」

アミイもダオスも、表情を曇らせる。

そうか、話を聞く限りこの世界で気が付いた時点で捕まっていたみたいだし、知らないのか。

「この世界は、二人が今まで居た世界とは別の世界だと思うぜ。こ

こは”ヘル”。一種の地獄だと考えられてる」

「じ、地獄……！？」

アミイが肩を縮めて怯えた声を出す。

その肩を、ダオスが優しく抱いた。

「あ、怖がらないでいいと思うぞ。モンスターは居るけど、拷問する鬼みたいなヤツは居ないからさ」

「ここが地獄だとしたら、現実の私は死んだのか？」

「……たぶんな」

「たぶん？」

「ああ。この世界に来る人は、全員”記憶を失ってる”んだ」

だから、誰も自分の生前を覚えてない。

けど稀に、断片的な記憶を思い出す奴が居る。

そいつらは一様に「自分は死んだ」と言う。

「だから、たぶんここに居る人は死んだ人……ってことになってる」
「なるほど」

ダオスは何やら納得したような表情で自分の手を見ている。
それに対し、アミイは今にも泣き出しそうな表情を必死で保っていた。

「あ、アミイちゃん？　ここで泣くのは不味いぜ……？」
「う、うん……」

空き家から泣き声が聞こえれば、不信がられて兵士に通達されるかもしれないし……

かと言って、宿めるのも……参ったなあ……俺、こんな顔だから子供の相手とか苦手だし……

「アミイ、泣かなくて良い」
「で、でも……もし私に、お父さんやお母さん……お兄ちゃんが居たら……」

「例え死んだのだとしても、君は優しい子だ。誰もが君の死を尊く思い、手厚く葬ってくれている。君はこれからの心配をすればいい」
「……うん」

「君の事は、私が責任を持って守る。私は、たくさんの”誰か”の為に戦っていた……そんな気がする」

ダオスの言葉で、落ち着きを取り戻したアミイ。
漂うイケメンオーラが凄まじい。

言ってることも真実味があるし、力強い。

「もしかしてダオスは記憶が残ってるんか？」

「いや……そんな気が、するだけだ」

妙に頼りがあるダオス。

どこかのお偉いさんだったのかもしれない。

と言つか、金髪に大きなマントと言う風貌は目立ちまくる。

どう考えても一般人じゃないし、逃げるのに適していない。

まあ、俺も漆黒の翼として活動するために改造白衣なんか来てるから目立つんだけれど……

「……夜になったら出ようぜ」

「行く先は？」

「漆黒の翼のカレギア地区だ」

「そこに行けば、助かるんですか？」

「ここよりは安全だと思うぜ」

アミイはダオスに抱かれ、目を擦りながら聞いてくる。

良かった、落ち着いてきたみたいだ。

ロリっ子は可愛いなあ。

「ふえ？」

「いやいや、何でもないよアミイ」

ぶにつとしたほつぺた触りたいなあ……髪型弄って遊んであげたいなあ……

あ、あと、「10年したらお嫁さんに来なさい」とか冗談でも言うてみたいセリフだよなあ……

「ダオスさん、バットが気持ち悪い……」

「バット、その顔でニヤつくのはやめた方が良い」

「ひ、酷っ！？ 差別だそれ！？」

人相が悪いと微笑むのも禁止かよ……
全く、世の中イケメン基準で嫌になるね！

カレギア王国 首都バルカの空き家 - 夜 -

「さて、行動開始だ」

「目的地は？」

「バルカから出て、ずっと西に向かうとバルカ収容所って建物がある。そこが漆黒の翼のカレギア支部だ」

「収容所が支部？」

ダオスが不思議に思うのも無理は無い。

収容所を拠点にするなんて、普通は考えられないからな。

「この世界には、最初から建造物があるんだ。ワザワザ建てる必要が無いから、再利用さ」

「最初から？」

「そう。この街だって、”誰も作って無いのに最初からここにあった”んだ」

ヘルは無数の階層に分かれている。

山中の村や、海辺の町。石造りの遺跡があれば、鉄でできた塔が立ち並ぶ街もある。

ここだって霧に包まれた不思議な街だ。

その全てが、”ホール”で繋がっている。

ホールの場所は様々で、そして異質。

木の根元に扉があったり、牢屋の向こうが草原だったりすると、そこがホールだ。

「簡単に説明すると、Aの世界の”高い位置”からBの世界の”低い位置”に移動してるって感じだな」

「あ、だから階層って言うんですね？」

「そ。徐々に上に上っていくように感じるからな」

「そして、ホールの先には、ここのような町がある……と言ったことか」

「ホールが見つかれば、それだけで街が一つ増える。漆黒の翼みたいに拠点を沢山持つ組織は、家を建てるよりもホールを探した方が建設的って訳さ」

そんな話をしつつ、店の外を覗き見る。

だれも居ないのを確認して、外に出る。

後は街の外までダッシュだ。

兵士に見つかる前に、支部に逃げ込めればいいんだけどな。

「こっちだ。こっちの広場から街の外に出られる」

店を出て、博物館を背に進むと噴水のある広場に出られる。

そこには街の外へと繋がる入り口があって、外には荒野が続いている。

その荒野を右手に進めば、バルカ収容所だ。

「ダオス、アミイちゃんしっかり抱えとけよ！」

「……バット」

「何だ？」

「アミイを頼む」

「え？ おわ、ちよつ……」
「きやあつ！？」

俺の背後を走っていたはずのダオスが、いつの間にか横から俺を抜き去った。

抜き際、アミイを俺の胸元に押し付けるように渡され、転ばないように中腰になって立ち止まる。

何事だ！ とダオスに食って掛かろうとしたら、目の前にダオスの腕があった。

最初にダオスの腕を見た時は、拒絶されているように感じたが、今は……守られているように感じる。

「つて……あいつは……！？」

ダオスの腕の先、バルカの門前に一人の男が立っていた。

黒髪の短髪で、ピンク色のマント。高そうな青い服と白いズボン……そして、腰には一本の白い剣。

緩く湾曲していて、根元には黄色い水晶のようなものが備わっている。

「まさか、騎士団……！？」

「騎士団の客室剣士、リオン・マグナスだ。命令により、貴様らを拘束する」

「待ち伏せ、と言うわけか」

ダオスの呟きに、俺はしまったと思った。

そうだ、街の出口は二つしか無い。

監視するのは簡単じゃないか……こんな強敵そうな剣士が配備される前に逃げた方が良かった。

「悪い、ダオス、アミイ……判断を間違えたぜ」

「謝る必要は無い。私もアミイも、感謝している」

「う、うん。バットさんは悪いことしてないよ。顔は、悪いけど」

「最後の部分が俺のピュアな部分を砕いたけど、ありがとう」

リオンと名乗った剣士は、腰の剣を抜いてこちらに向ける。

くそ、やっぱり戦闘になるか……けど俺、武器も持っていないし……指先一つでダウンさく拳法も使えない。

もちろん、拳振っただけで魔神のごとき衝撃波が出るはずも無く。ダオスも、戦うつもりっぱいけど勝てないだろうし……

「はあっ……！」

>ダオスレーザー<

「!？」

突如ダオスの腕が発光し、リオンに向かって光が飛ぶ。

間一髪のところでかわされたが、光は街の外の地面にあたって土を抉った。

凄まじい威力だった。

「だ、ダオス……お前、実はすごい強い？」

「わからん。ただ、お前たちを守るくらいは出来そうだ」

先ほどまでダオスが纏っていた気品あるオーラが、そのまま強者の風格に代わる。

触れただけで消し飛ばされてしまいそうな気迫と、その背中に居させてもらえるという安心感が同時に俺を包む。

まるで魔王——そう、魔王と呼ぶに相応しい男だ。

「ちょっとは楽しめそうだな……行くぞ！」
「来い……！」

つづく

第一話 霧の王都で捕まえて（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

今回新たに登場したのは、

リオン・マグナス

でした！。

ちなみに、前回のミラはゲーム本編ではシナリオを進めると生き返りますが、この作品は「一度死んだ魂」がたどり着く世界と言う設定なので、一度でも死んでいれば登場します。

同じ理由で、リオンもデステイニー本編で死亡扱いなので。

他にも、リメイクされて死なくなった人とかも居るけれど、そのキャラはこの作品では死亡扱いってことです。

第二話 王都脱出、救助到着（前書き）

ダオスとアミイの絡みを考えると脳汁が溢れます。

第二話 王都脱出、救助到着

「おりゃあ！ 食らえええ！」

「邪魔だ！ >月閃光<」

「つてどわああ！？」

首都バルカの噴水広場で、俺とダオスは騎士団のリオンと戦っていた。

俺は武具屋から拝借してきた大剣を持ち、リオンに向かって振り下ろすが軽々と弾かれる。

うっわ、マジ威力パねえ！

俺は弾き飛ばされ地面に転がり、そこに追撃をかけるようにリオンが剣を振るう。

「大人しくしている！ >魔神剣<」

剣の衝撃波が、地面を走ってくる。

慌てて避けようとして後ろを振り向いたら……そこにアミイが居た。ちくしょう、駄目じゃないか。

「うぐっ……！」

「バットさん！」

俺は腹に魔神剣をモロに食らった。

何とか気絶せずにすんだけど、メツチャクチャいてえ……強烈だぜ。

「バット、下がれ！ アミイを頼む！」

「悪い……！」

ダオスが俺とリオンの間に入り、魔術を使って牽制を図る。
俺は霞む視界の中、痛みに耐えながらアミイの元に戻り、一緒に噴水の影まで移動する。

俺はそこで改造白衣の中に仕込んである”ある物”を取り出した。

「バットさん、それ何ですか？」

「これは”アップルグミ”って言うアイテムで、体力を急速に回復してくれるんだ……んぐ」

アップルグミを口の中に放り込んで、二、三度噛む。

すると、腹の痛みが消えて視界がはつきりする。

キラリン！ 体力が30%くらい回復した！

これがアップルグミの効果。切り傷程度なら直ぐに完治する。

「凄いですね……でも、あんまり動かない方が……」

「ははっ……動けても、俺じゃー戦いに参加できねえや」

一撃を与えることも出来ず、軽々とぶっ飛ばされてしまった。

魔神剣に耐えられたのでさえ、奇跡じゃね？

漆黒の翼に入って、何度か戦闘に遭遇したことはあった。

けど、毎回誰か強い奴と一緒にだったから戦う必要は無かったんだ。

と言っか、守ってもらった。

実際に戦いに身を投じることが、こんなにも大変なことだなんて思いもしなかった。

だってよお、みんな軽々と衝撃波出すからさ……あんなに痛いと思わなかったぜ……

「バット！ アミイ！ 来い！」

噴水の向こうから聞こえたダオスの声が聞こえてきた。

俺はアミイを背負って噴水の影から出る。

すると、街の出口門の前に足を石化させられたリオンが居た。

「急ぐぞ！」

「くっ……！」

ダオスに促され、悔しそうな表情のリオンを残して街の外に出た。

そのまま俺達はバルカ収容所に向かって走り始める。

リオンを撃退したダオスは疲れた様子も見せず、と言うか俺よりも余裕の表情で走っている。

「強いなダオス！ お前が居れば逃げ切れるかも！」

「いや、あのリオンと言う剣士……手を抜いていた。やる気が無かったただけだ」

ダオスは先ほどから自分の手を見つめていた。

その動作は、以前漆黒の翼に居た銃使いが弾が詰まった自分の拳銃を見るような目つきだった。

ダオスにとって、武器は魔術（だと思う）。なら、きっと魔術の調子が悪いんだろう。

「……もつと別の、何かを……」

「何か気になるのか？ ダオス」

「……いや……何でもない」

明らかに様子がおかしいのに何でもないとはこれいかに。

きっと聞きたくないんだろうと推理して追及しない俺がっこいい。

「ダオスさん、悩み事だったら教えて？ 私、ダオスさんが苦しむ

のは嫌だよ?」

「……アミィ……」

俺におぶさっているアミィが、まさかの大人発言。
こんな健気な子が幼女な訳が無い。

「……私には先ほどの力以外にも、何か使える力があつたと思うのだが……それが何なのか、どう使うのかが思い出せないのだ」

「アレ以外の力……?」

「重要な……力だった気がする……」

ダオスにとって、記憶を失っていることは相等なストレスになっているようだった。

確かに、俺もこの世界に来て直ぐは悩みっぱなしだった。

生前の自分はどうしたのか、これからの自分はどうするのか。

そんなことばかり考えていた。

けれど、結局やりたいと思つた気持ちや自分の素直な気持ちなんだろう。

そう思うことで、俺は今、何とか生きてこれている。

「……なあダオス。分かんないや、思い出すまで放っておきゃーいーんじゃねーか?」

「……」

「この世界では、誰だって過去を探してる。もし忘れてることが大切なことだったら……絶対思い出すだろ」

「お前も、探しているのか?」

「俺は……どうなんだろうな?」

誰だって探してる。

過去を思い出そうとうするのは、この世界では一般的すぎて必死に

なる必要性を感じない。
少なくとも、これまでの生活で感じなくなった。

「まあ、俺のことは……」

「バ、バットさんダオスさん！ 後ろ！」

俺の背中に居るアミイの声を聞いてダオスが振り返り、苦い顔をした。

俺も恐る恐る振り返ると……先ほどの剣士リオンが、馬に乗って追ってきていた。

やばい。速度的に考えて、あと数十秒で追いつかれる！

「ダオス、迎撃を……！」

「……今度は難しいかもしれぬ……」

「え？」

良く見ると、リオンの馬の後方にもう一頭馬が居る。

銀色の短髪、青い服。腰には剣を携えている。

「まだ居たのか……騎士団は一体何を企んでるんだか……！」

「バット。アミイを連れて先に行け」

ダオスはそう言うと、立ち止まって両手を構える。

俺はダオスを追い越した所で慌てて足を止める。

「お、囨になるつもりか！？」

「ダオスさん！？」

「案ずるな。お前達を守りながらでは自由に動けないが、私一人なら負けはしない」

「つまり……片付けてから追いつくから先に行けってことか？」

ダオスは頷き、目配せで行けと示した。

俺は迷った。確かに俺は戦力にならない。

けど、ここでダオスに全て任せたら逃げている気がする。

「ダオスさん、駄目！」

「つとと」

アミイが俺の背から降りようとするのを、慌てて押さえつける。

そうだ。ここで俺が戦ったら、またさつきみたいにアミイに危険が

……

「……くううう！　ダオスううう！　死ぬなよおお！」

俺は背中にアミイを強く押し付け、走り出した！

叫ぶアミイ！

戦い始めるダオス！

そして、逃げる俺！

悔しいけど、俺じゃ駄目だ……俺は悔しさのあまり目をつぶって全速力で走った！

「バットさん！　バットさん！」

「言つなアミイ！　俺だつて辛いんだ！」

「じゃなくて、前見てください前！」

「前？　前つてぶべらっ！？」

アミイの声で目を開くと、目の前にあったのは二頭の馬。

バルカ収容所の方向から走ってきたらしき馬に、ぶつかった俺は死んだ。

その後、バット達の姿を見た者は誰も居なかった……

「って死んでたまるかつ!？」

「うわ!？ びっくりした」

衝突した馬に乗っていたのは、鎧の剣士。

ボサボサの金髪、緑色のハチマキ、妙に長いマント。

そして、妙に間の抜けた声の持ち主は……

「スタン！」

「あ、バット。ここに居たのか。夜になっても帰ってこないから、心配して迎えに……」

「そんなことどうでもいいから！」

「どうでもいいのか!？」

「手伝って！ 騎士団に襲われてるんだ！」

スタンは馬から下りて、俺達の背後で戦うダオスのことを見た。

二人の相手に対して魔術と巧みな格闘術で応戦するダオスを見て、何の変哲も無い普通の剣を抜いた。

そして、背後の馬に乗るもう一人の人物に声をかけた。

「デймロス」

「ああ」

デймロスと呼ばれた白い服の剣士。

長い紺色の髪の毛をなびかせ、馬から降りる。

「デймロスも来てくれたのか！」

「スタン一人で搜索に行かせると、今度はスタンの搜索隊が必要になるからな」

「何だよソレ。酷くないか？」

「本当のことだろう」

そんな言い合いをしつつ、デймロスも剣を抜く。
デймロスの持つ剣は、赤い柄を持つ銀色に光る片手剣。

「デймロス、あの二人……」

「ああ。恐らく、我らと同じ……」

「……戦えるか？」

「愚問だ」

スタンとデймロス。

この二人は漆黒の翼の中でも有名な剣士だった。

二人で共有して扱う一本の剣。その剣を持った者は昌術と呼ばれる術を用いて戦う。

戦況によって剣の持ち手を変えて戦う二人のコンビネーションは漆黒の翼の中でも稀有な存在。

けど、何かモテるのはデймロスだけ。

スタンはそれを毛ほども気にしていない（気にしてないからモテないのか）から、ある意味でここでもバランス取れてるみたいだ。

「下がってて。あの人は、俺が責任を持って助けるから」

「お願い！ ダオスさんを助けてあげて！」

アミイが俺の背から飛び降りて、スタンにしがみ付く。

瞳に涙を溜めて服にしがみ付いて、必死でスタンを見上げる。

そんなアミイを見て、スタンは優しく微笑んだ。

「大丈夫。俺とデймロスが居れば、世界だって救えるよ」

「あまり大口を叩くな、スタン。行くぞ」

「よし！」

un

第二話 王都脱出、救助到着（後書き）

読んでくれてサンクス。

今回は主人公の武器が出ましたね。はい、「アップルグミ」です。
ん？ 間違えたかなあ……

今回新たに登場したキャラは

ピエール・ド・シャルティエ
スタン・エルロン
ディムロス・ティンバー

です。

次あたり、支部に到着かな？ 思ったよりも長引きそうだなぜ。

第三話 バルカ収容所の朝は遅い（前書き）

今回は説明回になってしまいました。

が、とりあえずこれしないと先に進めないわけで。

第三話 バルカ収容所の朝は遅い

カレギア王国 バルカ収容所 - 昼 -

「……ここは……どこだっけ？」

「あ、お早う御座いますバットさん。もう皆さん起きてますよ？」
「……え？」

目が覚めて起き上がってみると、そこは漆黒の翼のカレギア支部として使われているバルカ収容所。
収容所の通路には長テーブルが置かれ、食事をする場所となっている。

各牢屋はそれぞれ医務室・仮眠室・食糧庫などに使われていて、俺が居るのはその仮眠室だ。

俺のことを覗き込んで声を掛けてきたのは、昨日助けたアミイと言う少女。

眩しいほどの笑顔を向けてくれている。

ふう、最高の目覚めだぜ。

「ああ、おは……」

「やっと起きたかい！ この寝ばすけが！」

「うわぁ！？」

突然現れた老婆の顔に驚き、狭い元牢屋の中に置かれた安物のベッドの上から転げ落ちる俺。

いてて、腰打った……

「も、もう少し優しく起こしてくれよタマラさん……」

「もう昼前だよ！ 全く、昨日大変だったようだから寝かしておいてやったつてのに……そこのお嬢ちゃん朝ちゃんと起きたよ！」

ベッドに手を着きながら起き上がる俺が見たのは、木製の定規を持った老婆タマラさん。

漆黒の翼の技術屋として数々の発明品を生み出す片手間、支部の家事をこなしてくれる。

今みたいに、寝過ごした団員を叩き起こしたり……ね。

「バットさん、ご飯食べますよね？」

「あ、ああ……頼もうかな」

「はい！ タマラさんが作ってくれてるんですよ」

「朝の残りだよ！ 処理しとくれ！」

仮眠室の前のテーブルに置かれた、明らかに作りたてのマーボーカレー。

俺は乱れた服を直して、テーブルに座った。

何か、タマラさんの料理はダラけた格好で食べたくないって気持ちにさせてくれるんだよね。

「あー、えーと。頂きます、タマラさん」

「さっさと食べな！」

マーボーカレーの中から熱々の豆腐をすくい上げ、一気に口の中へ。熱いのと辛いのと美味しいのが一緒に来て、幸せな気分になる。

これがタマラさんの料理の力か！

「……ってあれ？」

「どうしました？」

俺の隣に座ったアミイは、俺の食べっぷりを眺めながら疑問の声に耳を傾けた。

そっぴや俺……昨日の夜の記憶が曖昧だな……どうしたんだっけ？
っていうか、ダオスは？

「あ、ダオスさんなら今は外です。風に当たってくるって」
「そ、そっか」

あー、何か段々思い出してきた……確か、騎士団のリオンと銀髪の男が追ってきて……スタンとディムロスが助けに来てくれて……

* * * *

首都バルカとバルカ収容所の中間地点。

リオンの剣を、ディムロスの剣が弾き飛ばし、スタンの冒険が、銀髪の男の詠唱をストップさせる。
それで、この戦いに決着がついた。

「くっ……」

「シャル、無事か」

「坊ちゃんこそ……それにしても、こいつら……」

「ああ……貴様らの持っている剣は……」

リオンとシャル（と言う名らしい）はお互いに何か話し合い、しかし戦闘が続ける様子は無い。

その様子を確認したスタンとデймロスはお互いに剣を収めて踵を返した。

「さあ、帰ろう。ダオスは俺と……デймロスは、バットとアミィちゃんを頼む」

「ああ」

その様子を見たリオンが、弾かれた剣を再び手にとってこちらに食いかかる。

「待て！ まだ勝負はついていない！」

「我らはこいつらを迎えに来ただけだ。それ以上のことをするつもりは無い」

「くっ……！」

デймロスの一喝に、リオンは剣を下ろす。

確かに、こちらは5人（内2人は戦力外。もちろん俺含む）で相手は2人。

リオン達の勝機は薄い。引くことはプライドが許さないけれど、引かざるを得ないといった感じだ。

スタンたちもそれを悟ったのか、こちらから去ることにした。

リオンに睨まれながら、俺達はバルカ収容所に向かった……

* * * *

「それで、俺はそのまま仮眠室でグッドナイト……だったっけ」

「はい。あ、その……バットさん。助けて下さってありがとうございます。」

「ああ、いーっていーって。トラブルに巻き込まれるのにや慣れるからな」

「何が慣れてるだい！ その度にあたし等に迷惑かけて！ ちったあ反省したらどうだい！」

昨日のことを思い出しているうちに食べきったマーボーカレーの皿を回収しに来たタマラにキツイ一言を貰って、俺はテーブルを立った。

んなこと言っても、街歩けばイチャモン付けられるんだから仕方ないだろ……そんなに人相悪いのかねえ……

「とりあえず、ダオスに会つかない。アミイ、ダオスは外に居るんだよな？」

「はい。一緒に行きましょう」

「おう」

アミイが仲間に加わった。

非戦闘要員だけのパーティだけどな！

カレギア王国 バルカ収容所の外

収容所を出ると、柵に寄りかかって空を見上げるダオスが居た。今日はバルカでは珍しい晴れの天気で、空が見えた。

「よー。気分はどうだい、ダオス」

「バットか……すまないな。世話になる」

「いやー、実際に世話してるのは俺以外の皆なんだけどな」

晴れた空の下で見るダオスは、やはり異質だった。

長い金髪や大きなマントもそうなのだが、何か存在感が強いと言うか……風格があると言うか。

言葉で表せない強さを感じた。

「んでさ。この先どうするンだ？ 行く宛て、無いんだろ？」

「ああ……それについて、今朝デймロスと言う男から提案を受けた」

「提案？」

「えつと、このまま漆黒の翼として活動しないかって言われました。

”本部”に行つて登録して来たら、つて」

「へえ、デймロスがねえ」

デймロスは今、このカレギア支部の支部長。

デймロスの提案ならば、本部も納得するだろうけれど……

ダオスはそれでいいのかな……？

「それで、バットに活動内容を聞いておくように言われた」

「あ、私にも説明お願いします。タマラさんに聞いたら、メンドクサイって言われちゃいました」

「わああ、やつぱり解説役う！ 俺が情報員つて設定つてこの為だったんですかねえ？」

誰にとも無く声をかけて、俺は地面を指差した。

ダオスとアミィがその指先を見つめているのを確認してから、俺は説明を始めた。

「最初、この世界はもーっと下……リーネ村って言う村しか無かったんだ」

田舎の村で、住める人もそう多く無い。

そういえば、スタンはこの村だけの頃から居たらしい。けど、この世界の人はどんどん増えていく。

「増えていく？」

「ダオスとアミイみたいに、記憶が無い状態で発見されんだ。場所もバラバラで、法則性が見つからねーけど、確実に人は増えていった」

そのせいで、村に住める場所が無くなった。

それまでは、記憶の無い者同士が寄り集まって生活しているだけで住んでいたけれど、本格的に危うくなって他の村を探しに行ったらしい。

そして、穴を見つけた。^{ホール}

「何でも村の外れにあった孤児院の中にあつたとかで、そこから巨大な空中要塞の中に繋がっていたんだと」

「く、空中要塞……！？」

「俺も何度か行つたけど、凄く高くてビビったぜ。んで、その要塞の中にも穴があつて……って感じだな」

「なるほど。この世界の仕組みと歴史はわかった」

「ああ。んで、実際の活動はだな」

俺は今まで下を向けていた指を、今度は上に向けた。

「”上”に出ることだ」

「うえ……？」

「ああ。前に言ったように、この世界は階層に別れてて、少しずつ上に上って行ってたんだ」

いつの頃からか囁かれるようになった、この世界における神話のようなもの。

上へと向かう穴を永遠と進み続けると、この地獄のような世界から脱出して生き返ることが出来る。

最初は本当に確証の無い作り話だったが、上への穴が見つかるたびに真実味を帯びていった。

「上に昇れば昇るほど、残ってる街が精緻なものに変わって行くんだ。それこそ、別の世界みたいに」

「……別の世界……か」

「そ。だから、もし”上”ってのが無くても上の世界が見つければ生活が豊かになる。漆黒の翼は、そういう活動をしてんのさ」

もしかしたら無いかもしれない。けれど、いつかたどり着けるかもしれない”上”を目指して穴を探す者達。

その集団を、漆黒の翼と言う。

そして俺もその一人。

「見つかった新世界は、直ぐに皆に知らせてるんだ。移り住む奴とか、単に遊びに来る奴なんかも居るんだぜ」

「へえ、面白そう！」

アミイが目を輝かせて聞いている。

確かに、これは子供の頃だれもが夢を見る冒険そのものだ。

俺も、最初に組織に助けられたからって理由もあるけど、結局はこの活動そのものに面白さを感じて入団したしな。

「んで、どうするダオス？ 本部は現在分かつてる最上階層にあるから、上を目指すことになるけど」

「そうだな……」

ダオスは自分の手を見る。それは、昨晚もやっていた動作。

どうにも、ダオスは自分の忘れている能力のことが気になって仕方が無いみたいだ。

……そうだ。

「ダオス、じゃあ本部に行く前に、ちょっと医者に行かないか？」

「医者？」

「お医者さんですか？」

「ああ。名医で、色んな症状の人を治療してるって。何人かの記憶を戻してるらしいし。確か今、この一つ下の階層で活動してる筈だ」

少し前に聞いた記憶を掘り起こして、俺は色々な情報を並べる。こういう時こそ、情報員として活躍すべきだよな。

「なるほど……確かに、記憶を戻す足がかりになるのなら……」

「行ってみたいか？」

「ああ」

「よっしゃ、決まりだな」

「あ………あの！ ちょっといいですか！」

アミイが、今までよりも少し強めの……怒ったような口調で話しかけてきた。

今までのアミイは、慌てたり泣いたり、笑ったりすることはあれど怒ることは無かった。

突然の怒声に驚き、俺とダオスは言葉を失う。

アミイはそんな俺達に構いもせず、言葉を続けようとして……急に表情を変えた。

「……私も一緒に行っちゃ、駄目ですか……？」

アミイは、とても悲しげな表情を浮かべた。

置いて行っちゃ嫌だ、と駄々をこねる子供とは違う……悲しみを含んだ声。

その時の目が、ダオスが自分の手を見つめて居る時の目とダブった。もしかしたら、置いていかれること……それはアミイにとって、ダオスの忘れている能力並みの重要度を持った何かなのかもしれない。そんな子を置いていくなどと言えるはずも無く（と言うか始めから置いていくつもりは無い！）、俺は笑顔を浮かべた。

「一緒に行こうぜ、アミイ」

「……うん！」

こうして、俺とダオス、そしてアミイの旅が始まった。

つづく

第三話 バルカ収容所の朝は遅い（後書き）

今回の話で、導入編っぽいのは終了です。

次からはダオスとアミィとの楽しい旅が始まりますぜ。

まあ説明回なので、今回登場した新キャラは

キャシー・タマラ

だけでした。

それにしても、死んだキャラのみで話を構成するつもりだったので、色々キャラが足りなくなると思ったんですが……むしろ選ぶのに困るくらいでしたw

こりゃあ当分は困らないわあ……

悩むのは、オリジナルでヒロインでも出そうと思ってたのに、その隙すら無いということ。まあアミィちゃんが居るからしばらくはいかな！

ステータス画面 その1（前書き）

導入編が終わったので、ここらで主人公たちの状況を確認。
たまにこういうの入れるかもです。

ステータス画面 その1

・ 主人公

名前： バット

年齢： 17歳

特徴： 悪役面。特に目つきが殺人的に悪い。髪の毛は紺で、少し長め。

身長： 高くもなく低くもなく

体重： デブでもなくガリでもなく

武器： 滅菌手袋

頭装備： なし

体装備： 改造白衣

装飾品： グミ袋

術技： グミヒール 所持しているグミを一つ投じる荒業。
オリジナル

ボトルエイド 所持しているボトルを一つ投じる荒業。
オリジナル

スキル： アピールターゲット アピールすると5秒間、敵に狙わ

れやすくなる。

HPリラックス 戦闘中、何も行わず待機状態でいると徐々にHPが回復する。

グッドジョブ アイテムを使用した際の硬直時間がなくなる。

グミスナイプ どんな状況からでもターゲットイングした相手の口にグミを入れることが出来る。 オリジナル

称号 : 漆黒の翼 各地に点在する支部への出入りが自由になる
称号

役立たず 初期パーティとして戦闘に参加できなくなる

備考 : 完全なるアイテム役。戦闘フィールド外から支援するだけの存在として大活躍する予定（お

・ 現行パーティ情報

名前 : ダオス

武器 : なし

頭装備 : なし

体装備 : マント

装飾品 : なし

術技：ダオスレーザー 両手にエネルギーを収束して放つ強力なレーザー砲

ダオスコレダー 地面に高圧エネルギーを叩きつけて半球状の爆発を起こす

テトラアサルト パンチの高速4連撃。SFC版基準で石化効果有り

スキル：アンチマジック 自身に対して術の効果がなくなる。敵の攻撃も味方の回復・補助系も一切無効。

エアリアルアーマー ジャンプ中に攻撃を受けても仰け反らなくなる。

エアリアルガード 空中でガードができるようになる。
エアリアルジャンプ ジャンプした後にもう一度ジャンプする事が出来る。

エアリアルジャンプ2 エアリアルジャンプした後にもう一度ジャンプすることができる。

エアリアルスペル 空中で術を詠唱できるようになる。

エアリアルダッシュ 空中にいる間にフロントステップ行動が出来る。

エアリアルバック 空中にいる間にバックステップ行動が出来る。

クイックリカバー ダウン状態でもリカバリングできるようになる。

スペルキープ 詠唱キャンセル時、同じ術を発動すると中断された状態から詠唱が始まる。

スペルチャージ 術の詠唱が終了しても、×ボタンを押し続けることで発動待機状態で自由に動ける。

称号：準・漆黒の翼 これから漆黒の翼に入団する者に贈られる称号

魔王風の男 王の風格を漂わせる男に贈られる称号

備考：現在戦闘ができる唯一の存在にして現在最強のキャラ。
まだ記憶が戻っていないので禁呪文や時間干涉系の術は使えない。

名前：アミィ・バークライト

武器：なし

頭装備：なし

体装備：ワンピース

装飾品：なし

術技：なし

スキル：なし

称号：非戦闘要員 戦闘に参加できない者に与えられる称号
準・漆黒の翼 これから漆黒の翼に入団する者に贈ら
れる称号

妹風の少女 かもし出す雰囲気か妹風である少女に贈
られる称号

備考：戦闘には参加できないけれど、魔法攻撃力は最強（え

・ 参加予定キャラ情報

名前： ミラ・マクスウェル

武器： フェアーソード

頭装備： なし

体装備： 誰かが作った動き易い服

装飾品： なし

術技： ファイアボール 前方に火炎弾を飛ばす魔法。

ウィンドランス 敵を貫通する槍を発射。

ロケットライ 敵の足下から岩を突き出させてダメージを与える。

スプラッシュ 水流で敵を攻撃。

ラウンドエッジ 光のリングを作り出し周囲の敵にダメージ。

アサルトダンス 前進しながら5連続攻撃。

ルナティックスティング 空中の魔方陣から発射される光の矢で敵を攻撃。

カタラクトレイ 手を離れた剣が一瞬で敵を突き抜け戻ってきた後、飛び上がったミラがその剣を受け取り、追撃する。

スキル： エアリアルアーマー ジャンプ中に攻撃を受けても仰け反らなくなる。

エアリアルガード 空中でガードができるようになる。

エアリアルジャンプ ジャンプした後にもう一度ジャン

プする事が出来る。

エアリアルジャンプ2 エアリアルジャンプした後にも
う一度ジャンプすることができる。

エアリアルスペル 空中で術を詠唱できるようになる。

エアリアルダッシュ 空中にいる間にフロントステップ
行動が出来る。

エアリアルバック 空中にいる間にけバックステップ行
動が出来る。

リバイバルエナジーHP 戦闘不能から復活した際に、
どんな回復手段であってもHPが完全回復する。

リバイバルエナジーTP 戦闘不能から復活した際に、
どんな復活手段であってもTPが完全回復する。

称号：
称号： 漆黒の翼 各地に点在する支部への出入りが自由になる
称号

精霊の王風の女 王の風格を漂わせる女に贈られる称号

備考：
パーティinした途端に主導権を握ること必須なミラ
様。

ステータス画面 その1（後書き）

さて、次回からは・・・「ダオス編」って感じになるかなあ。
お付き合ってくださいませー。

第四話 ゼロス登場でエロスフラグ確保（前書き）

ギャグみたいなタイトルですね。ギャグですが。

第四話 ゼロス登場でエロスフラグ確保

カレギア王国 メセチナ洞窟 - 朝 -

霧が濃い内から馬車を飛ばした甲斐あって、太陽が昇りきる前に穴ホールのある洞窟にたどり着くことができた。
馬車のまま洞窟に入り、奥へと進む。

「ダオスは記憶優先かー。頑張ってくれよ」

「……皆は違うのか？」

「んー、人によるなあ。俺は後回しでいいかなって感じ」

手綱を引くのは、送迎を買って出てくれたスタン。

アミイは朝早くに出たこともあって、馬車の上で二度寝中。

うは、ほっぺたぶにぶに柔らけえ……

「バットー、また息が荒いけど大丈夫かー？」

「だ、大丈夫大丈夫……まだ理性が勝ってる」

「良く分からないけど負かすなよー？」

馬車は洞窟の奥にたどり着く。

そこにあるのは、鉄の檻。檻の先に広がるのは……忍者屋敷だった。
シルヴァラントに広がる森の一角に存在する、忍者の村・ミズホの里のからくり扉。

そこが、穴の在り処だった。

シルヴァラント・テセアラ ミズホの里 - 朝 -

「とうちゃーく。ここがシルヴァラントだ」

「ここが……」

「スターンくーん！ こつちこつちー！」

突然、ノリの軽そうな声で呼ばれて振り返る。

声の主は、からくり扉のあった建物（里の首領の屋敷らしい）の縁側に胡坐をかいている赤毛の男だった。

全体的にピンクでまとめた、いかにも遊び人っぽい服で、腰には短剣がぶら下がっている。

「ゼロスー。久しぶりだなー」

「でひゃひゃひゃひゃ。久しぶりだなー。ん、そっちのイケメンと小さいお嬢ちゃん是谁よ？」

「おーいゼロス。俺も居るぞー？」

「人相の悪いガキにや興味無いね」

「また顔の話だよ！ うんざりだよ！」

馬車を止めて、ゼロスに導かれるままに首領の屋敷に入る俺達。

アミイはまだ寝てるので、俺が運ぼうとしたらゼロスが抱き上げて運んでしまった。

うん、何か悔しいぞお。

「んで、何しに来たのよ？ 定期連絡なら昨日ミラちゃんが来たから、違うよな？」

意外と気が効くゼロスは、畳に座った俺達の前にお茶を出して、ちやっかり首領が座る座布団の上に座った。

いや、ちゃっかりと言うか、正解と言うか。

ここシルヴァラントの漆黒の翼の支部はここであり、その支部長はゼロスなんだ。

つまり、今ゼロスが座っている首領の座布団は、ゼロスのもの。

このチャラ男が何で首領なんだか俺には理解できない。

「ゼロス……と言ったな」

「言った言った。どした、イケメン？」

「このシルヴァラントに、名医が居ると聞き訪れた。ドクター・バースは何処に居る？」

「あー、その前に一ついいか？　ここはテセアラ。OK？」

「……？」

あ、しまった。説明してなかったっけ。

この世界は少し特殊な状況にあるから……どう説明しようかな。

「ここはちよつと前までテセアラって世界だったけど、シルヴァラントと一緒にになったんだよ」

わお！　簡潔な説明ありがとうスタン！

もうちよつと詳しく説明すると、少し前、ここにはシルヴァラントとテセアラって言う二つの世界が平行に存在していた。

けど、予兆なんて全く無くある時突然二つの世界が統合されちゃった。

それまで暮らしていたシルヴァラントとテセアラの人達の間で、土地の所有を巡って争いが起こったりして大変だったんだ。

その際、その暴動をたつた数人で押さえ込んだ奴らが居た。

そいつらが漆黒の翼のシルヴァラント・テセアラ支部のメンバーになっている。

つまり、ゼロスもその一人と言うわけだ。しかも筆頭。ううむ、信

じられないぞ？

ちなみに、この出来事を総称して”世界再生”って呼んでる。

「この連中もシルヴァラントって単語には敏感なんだ。なるべく言わないように頼むぜ？」

「事情は理解した。では、ドクター・バースの情報を……」

「あーはいはい。ドクターなら今は救いの塔に行ってるよ。明日には戻るから、今日は泊まってくといいさ」

「救いの塔？ そんな所に何しに行ったんだ？」

「”新しい道”が見つかったんだってさ。横穴かねえ」

ゼロスの言葉に、ダオスとアミイが肩を震わせた。

そうか、二人がバルカ城で聞いた”新しい道”って、穴のことだったのか。

けど、二人を拘束したことで新しい穴に何か関係性があるとは思えないけどな……

「んじゃよ、とりあえず風呂入って来いよ」

「……風呂？」

「でひゃひゃひゃひゃひゃ。この屋敷にゃー自慢の温泉があるんだよ」

くそう、何だこの支部の差別は。俺が働いてた支部なんて収容所だぞ。

なんだよ、支部が忍者屋敷で温泉付きって。

「んじゃ、風呂行こうぜえ」

「……私は遠慮しておく」

「んだよ、つれねーなあ」

「ゼロスが男を誘って温泉なんて珍しいな？」

「でひゃひゃひゃ、たまにはな」

スタンと同様、俺も違和感を覚えた。

ゼロスは女好きだ。

それもドが付くくらい。

男と温泉に入ろうとするなんて……これも世界再生の影響か！

「ちっげーよ。実はさ、今……女湯にすっげー美人が入ってんのよ」

「あー覗きの誘いだったんか。安心したぜ」

「何言ってんだよバット。お前は強制参加だからな？」

「そりゃーもう喜んでお供しますぜ兄貴」

「でひゃひゃひゃ」

さて。いつの間にか起きていたアミイが豚以下のものを見るような視線を送ってきているが、ゼロスがわざわざ覗きに行くほどの女性が温泉に居ると言う情報は見過ごせない。

ここは温泉の女性に期待してアミイの視線に耐えることを選択しよう。

これが運命の選択か……！

つづく

第四話 ゼロス登場でエロスフラグ確保（後書き）

読んでくれてありがとニャン。

しまった、日常見ながら書いたからはかせのにゃんがつつたにゃん。はい、ウザいですねすいません。

今回登場した新キャラは

ゼロス・ワイルダー

ドクター・バース

でしたー。まあドクターはまだ名前だけですが。

それで、ここでアンケートとってみたいと思います。

気軽にお答え下さい。

Q：温泉に入ってる美少女キャラ・・・何者なんだ・・・！？

1：プレザ

2：エメロード

3：ネビリム

4：アリエッタ

5：その他（キャラ名を記入）

10月5日までにコメントが無い場合はアンケートそのものは無かったことになります。

では、読んでくれてありがとニャン。

第五話 メイド登場！ アリシア・コンバティール湯船に立つ（前書き）

完全にギャグなタイトルになりましたが、アリシアちゃん登場です。シンフォニアで悲劇の運命をたどった彼女ですが、今作ではお色気にギャグに活躍して欲しいですね。あ、それと下ネタ注意です。

第五話 メイド登場！ アリシア・コンバティール湯船に立つ

ミズホの里 温泉 - 昼 -

堀の向こうに女湯がある。

説明終了。

「おいバット、もつと壁に寄れよ」

「……なんで俺が下なんだよ……」

男湯から女湯を覗こうとタオル一枚で肩車をするゼロスと俺。
幸い（？）なことに男湯に他の利用者が居ないので白い眼を向けられることは無いけど……

「くっそ、あとちよいなんだけどなあ」

「そ、そっいやゼロス？」

「あんだよ？」

「お前、羽生えてなかったっけ？」

以前、ゼロスが戦いに参加した際に背中から羽のようなものを生やして敵を一掃したことがある。

俺は余波でぶつとばされて木に頭ぶつけたから良く覚えてる。

けれど、当の本人であるゼロスは眉を潜めた。

「いやー、あれいつもできるわけじゃねーんだわ。あれ？ テンシ

ョン上がってるときとか？」

「今は高く無いのかよ？」

「違うテンションは高いのよ！？」

「エロスモードでは発動不可ってことか」

そんなことをやってる内に、足の限界が来た。
そろそろ足がガクつてなって落ちる……と思ったときだ。
突然、肩にかかっていたゼロスの足が浮かび上がった。

「バツト、感謝するぜえ」

「なん……だと……！？ こいつ飛んでるじゃねーか！」

「何か意識したら出せたわ〜でひゃひゃひゃひゃ」

くっ、こんなしょーもない状況で新たな力に覚醒しやがって。
仕方ない、ここは俺も新たな力に目覚めるしかないな。

「じゃああんぷ！」

「おわっ！？ ちょ、おまつ、離せ！」

「俺が！ 覗くまで！ 俺は足にしがみ付くのをやめない！」

ゼロスの足に飛び掛り、そのまま浮き上がる俺。

男の足にしがみ付いたまま女湯を覗くなんて、なんていう高等テク
ニツク。俺今輝いてる。

少しずつ上に上に……お、おお……もう少しで……

「キイヤアア！！ノゾケタアアアアア！！」

「奇声を発しつつ頭を振るな！ まだうまくコントロールできねー
んだよ！」

湯気の向こうに、辛うじて肌色が見える。おお、これが女湯か！
……マジで湯気しか見えねえな。

「もうちょっと……」

「お、おい！ マジでバランスが……あっ」

「あつ」

俺は身を乗り出す。

ゼロスがバランスを崩す。

足から手が離れる。

コンボがつながった！

「どわああ！？」

気が付いた時。俺は女湯目掛けてダイブしていた。

な、何が起こったのかわからなかった……頭がどうにかなりそうだった……

ド派手な水飛沫を上げて湯船に落下した俺は、そこで初めて危機感を覚えた。

「しまった！ 今日にはゴム持ってねえ！」

このまま女湯で●●パーティーが始まるのは必須、このままでは確実に●ませてしまう！

これは不味い、俺の危機管理能力とかそういう系の何かが問われてしまう。

だがここまで来て何もせずに戻るのはただのヘタレ。

俺は強く男らしく生きることを選ぶぞ。

と、覚悟を決めた矢先、目の前の湯気が晴れてピンクの髪の毛の少女が現れた。

「きつ……」

「ああ、そこに居たのか。さあ、来るんだ！」

「何をネジの外れた発言をしてるんですかこのスケベ大魔王ー！」

瞬間、視界が暗転した。

どうやら少女が突き出した細い腕が俺の頭にめり込んだようだったが、俺は拳以外の部分を見ていたので定かでは無い。

ミズホの里 温泉 - 夕方 -

「はっ」

俺は見知らぬ和室で目を覚ました。

と言っても、倒れた場所から考えるに首領の屋敷だろうが。

「……ってあれ？」

起きた俺が見たのは、俺の身体に纏わり付く布団と、それを縛っている縄。

んー、あれか。簀巻きって奴か？

おいおい、俺は電波じゃなくて青春男だぜ？

「って何じゃこりゃあ！？」

「あ、起きましたか？」

「……メイドさん？」

俺の頭のほうにある襖が開き、そこからメイド服を着た先ほどのピンクの髪の少女が入ってきた。

短めのピンクの髪は両サイドで青いリボンで結ばれており、かなり幼く見えるが17歳から19歳程度だろうか。

メイド服は、胸元から腰までが白く腕とスカート部分、ニーソックスが黒。

そしてパンツは白に薄いピンクのレース……か。

「っきゃあ!？」

「ぶぼっ!？」

メイドさんの踏みつけ攻撃が俺の頭にクリティカル。

何だよ、頭の上に立ったのはそっちじゃないかごちそうさまです。

「あ、えと……おほん。お目覚めですか、お客様」

「いやいや、今更取り繕っても……」

「何か仰いましたか、変態様」

「ごめんなさいお目覚めです申し訳ありません」

確かに、女湯にダイブしたのは不味かったな。

ゼロスにそそのかされたのを抜きにしても、覗くという行為を実行したのは間違いない……と思う。

簀巻きのまま頭を畳にこすり付ける俺を見て、メイドさんは笑いを漏らした。

ふう、良かった。許してもらえたか。

「許すと思います?」

「駄目ですか?」

「駄目ですよ」

笑顔で言われた。このメイドさん怖いよ。

「もうっ……でも、反省はしてるみたいですし……今回は許してあげます。半分はゼロスのせいらしいですし」

メイドさんは俺の簀巻きを解き、襖の向こうを指差した。
そこには料理が配膳された盆が並んでおり、ダオスとアミイが座っていた。

その横に頭でデカイコブを作ったゼロスが正座していたのを見て、俺の心は軽くなった。

「ダオスさんとアミイさん、バットさんが起きてから食べるって言うて食べるの待ってたんですよ」

「え？ そーだったんか……俺なんか無視して先に食っていーのに」
「ふふっ」

その言葉に、更に笑うメイドさん。
何だ？ 何がおかしいんだ？

「お二人とも言ってます。きっと起きてきたら”先に食べてれば良かったのに”と言うと」

「マジで？」

アミイはえへと笑って頭に手を当てて、照れた様子だ。
ダオスも視線を逸らし、少し表情を崩す。

「バットさんなら、そう言うと思って」

「恩人に対して失礼な行いは出来まい」

「……お前ら……良い人すぎんだろ……」

アミイの純粹な笑みと、ダオスの無表情が愛しく思えた。
そうだよな。二人とも、ずっと城に居て出てきて最初に助けたのが俺なんだ。

そつか……俺、恩人なんだな。恩人、か……勝手に巻き込まれて、

足引つ張ってただけな気もするけど。

それを感じた時、俺の中で何か違和感のようなものが出来た。俺は、二人に何かしてあげられるのだろうか。

「でも、こんな二人にここまで感謝される貴方も、きっと良い人なんですよ」

「え？」

「あ、申し遅れました。私はアリシア。アリシア・コンバティールです。宜しくお願いしますね、バットさん」

メイドさん改めアリシアは、俺に手を差し出した。

つづく

第五話 メイド登場！ アリシア・コンバティール湯船に立つ（後書き）

読んでくれてありがとう！ ひゅーひゅー！
今回新登場のキャラはもちろん

アリシア・コンバティール

です。プレセアの「妹」で、リーガルの嫁です。
かなり設定の少ない子なので、色々オリジナル要素が入ってしま
うと思います。まあこれも二次創作の面白さと言つことので一つ。

第六話 ミズホの里のドクター・バース（前書き）

昨日、テイルズシリーズを良くプレイしてる友人にこの作品（今後の展開も含めて）を見せたんですけど・・・「出てくるキャラがマインナーなのが居てわからない部分がある」と言われました。

予備知識なくてもいいじゃない。普通は出てくるキャラ全員素性不明が普通じゃない。ってことで六話です。

第六話 ミズホの里のドクター・バース

ミズホの里 首領の屋敷 - 夜 -

俺とダオスは大部屋を割り当てられ、そこで眠ることになった。

布団を二つ敷いてもまだまだ広く、襖には金の刺繍、屏風には龍と虎の絵。

テーブルは一枚板で出来た漆塗りのものだった。

アミイはアリシアに懷き、この屋敷で働く彼女の部屋で共に寝ることになったらしい。

「しかし、急な客に対してこんな立派な部屋を割り当てられるなんて……旅館かここは」

「この屋敷を切り盛りしているのは、ゼロスとアリシアの二人だけらしい」

「へえ……やっぱ凄いんだなあ、ゼロスは」

このシルヴァラント・テセアラが世界融合を果たした際に起こった混乱は凄まじかった。

それを鎮め、統治したと言うゼロス一行の偉業を俺は信じられなかった。

と言うより、信じたくないだけ。実際、ゼロスは凄い奴だ。

ゼロスが世界再生の中心に居たと言われたら、納得できる。スケベだけど。

更に言うと、ゼロスは漆黒の翼の情報員の統括もしてる。

つまり、情報のスペシャリスト。スケベだけど。

「時にバット」

「ん？」

「お前は何か過去について思い出したことはあるのか？」
「と、唐突だなあ」

ダオスはガラス戸を開き、縁側から夜空を見上げた。
その仕草が、何かを思い出そうと必死になっていた過去の自分と重なった。

俺は布団にあぐらをかいて、ダオスから視線を逸らした。

「……俺はダオスみてーに戦えなかったし、ゼロスみてーに頭も良くなーから……
生きるのに精一杯だったんだ。だから何かを思い出そーなんて考える暇すら無かった」

最初は荒れてた。

この顔が周りに与える印象そのままに、自分が悪だと思ってメチャクチャやったり……

漆黒の翼に助けられて、自分の本来の性格通りに振舞えるようになるまで時間が掛かったし。

何よりも、俺は過去の自分のことを知るのが怖かった。

もしかしたら俺は、”今の俺”も素直に出せないまま暗い人生を送っていたのかもしれない。

もしそうなら、俺は思い出したくない。

「ダオスも、無理に思い出すことねーぞ？ 忘れたくて忘れてるのかもしれないーだろ？」

忘れたくて忘れたくて、忘れられたのかも知れねーだろ？」

俺の言葉を、ダオスはどう受け取ったのか。

過去を思い出すことを拒む臆病者と取ったのかもしれない。

俺の考えに賛同したのかもしれない。

俺は、まだダオスのことを何も知らない。
そしてダオスも、俺のことを何も知らない。
だから、こんなに近くに居るのにお互いのことが分からない。

「……私は思い出さなければならぬ……」それだけ”は覚えているんだ……例え、思い出したことが既に手遅れだったことだとしても……覚えていなければならぬことだった気がする……」
「覚えていることに意味があるってことか……？」

ダオスは軽く頷いた。
忘れていること、そのものが罪だと言うことなのだろうか。

「……アミイ？」
「え？」

ダオスの呟きを聞き、俺もダオスに並ぶ形で縁側に出る。
すると、庭先を歩いているアミイが暗闇の先に見えた。

「あ、ダオスさん。バットさん」
「どーした？ アリシアの部屋で寝るんじゃないのか？」
「は、はい。それはそうなんですけど……」
「？」

アミイは俺に声を掛けられるまで、何かを探す風な仕草をしていた。
落とすような物は持っていなかったし……だとすると、何を探していたのだろう。

「何か思い出したのか？」
「いえ……でも……この里の雰囲気、ちょっと懐かしいなあって感じて……それだけです」

「懐かしい……？」

アミイは小さく頷き、そして月を見上げた。

「あの月も、誰かと一緒に……見たのかな……」

夜空に輝く球体。

いつもそこにあるものだからこそ、そこに何か特別な感情を抱かずには居られないんだろう。

ダオスも、アミイも、俺も、月を見ていた。
それは確かな記憶だった。

ミスホの里 首領の屋敷 - 朝 -

俺はドクター・バースの診察を受けていた。

救いの塔からドクター・バースが帰還したとの報告を受けた俺達は、早速ドクターの家に向かった。

そうしたら、俺もまだ診察を受けたことがなかったからと言っ理由で診察を受けることになった。

「んー……身体の方は大丈夫だね」

「ああ、ありがとーございます」

「バット君は、記憶の方はいいのかい？」

「いーんですよ。俺は忘れたままでも」

ドクターの本名は、ケビン・バース。

白衣が似合う、茶髪の男性医だ。何でも”とある方法”で記憶の断片を思い出させる方法を考案したとかで有名。

現在は漆黒の翼に入り、専属医師って訳じゃないけどどこかの支部に居ることが多い。

「ふむ。では、次は……アミイ君だね」

「あ、はい」

ドクターの家は小さな診療所みたいになっていて、部屋をカーテンで仕切って二つに分けていた。

ドクターが座る椅子のあるエリアを診察エリア、入り口のある方を待合エリアになっている。

待合エリアにはアミイとダオス。それとアリシアとゼロスが居る。俺はアミイと交代する形でカーテンから出て、待合エリアになっている椅子に座った。

「どうでした？ 記憶とか戻りました？」

「いや、俺は頼まなかったよ」

「……そうなんですか……」

アリシアは、聞いてはいけないことを聞いてしまった、と言うような顔をした。

特にそういうことは無いんだけど、でも何だかそれでいい気がした。

きつと、それが俺の素直な気持ちなんだろう。

過去なんて、知りたくない。

「おや、バットじゃないか」

「お、ミラ」

玄関が開いて、金髪の女性が入ってくる。

それはプロローグ冒頭で共に行動したミラだった。

ミラは、ドクターが救いの塔へ行く際に護衛として付いていつて、今朝帰ってきた所らしい。

「ミラちゃん、おつかえりー」

「うむ。ゼロス、アリシア。先ほど戻った。連絡が遅れたな」

「いえ、無事ならいいんですよ」

「すまないな。ところで、バットはどうした？ どこか怪我をしたか？」

「いや、ちよいと新しい住人を見つけたから、記憶をね」

「なるほど。そっちの男がそうなのか？」

「ああ。ダオス、こっちの金髪はミラ。戦闘員のエースだ」

「宜しく頼む。エースと言われるのは、正直こそばゆいが……戦闘員として働いている」

「……ダオスだ。よろしく頼む」

二人が自己紹介を終えた頃だった。

突然、カーテンの向こうから悲鳴が聞こえた。

「いやあああああああああああああああああ！」

「アミー！？」

全員、カーテンを引きちぎらん勢いで診察エリアに突入する。

そこには、頭を押さえてうずくまるアミーと、アミーを助け起こそうとしているドクターの姿があった。

「ドクター、アミーは！？」

「わからん。記憶を取り戻した途端、うずくまって……」

「いや……いや……お兄ちゃん……クレス……さん……」

アミーが声を発することに、世界が白く覆われていく。

比喻表現じゃない。

本当に、景色が白くなっていくんだ。

「こ、これは……！？」

「いや……いや……私は……私は……」

「アミィ！」

「殺されたんだ……」

つつく

第六話 ミズホの里のドクター・バース（後書き）

読んでくれてありがとう！

今回登場したのは、ドクター・バース改めケビン・バースですね。さてさて、長い前振りも終わり、とうとうアミイが記憶を取り戻して新たな展開に。ふと思いついたので、次回から「スキット」的な雑談を入れようと思います。今のままだと、本当にメインストーリーだけ書いてる感じになるので。

第七話 アミイの過去とアレクセイ騎士団長（前書き）

今回はシリ阿斯回だった。

第七話 アミイの過去とアレクセイ騎士団長

トーティスの村 広場 - 昼 -

焼け落ちた家々、崩れた塀。

地面に落ちた鐘に散乱した剣と弓矢。

その中に整然と並び、木で十字架を模った無数の墓。

「ここ……は？」

「……私の死んだ場所で……す」

俺達は先ほどまでドクター・バースの家で診察を受けていた。

しかし、アミイの記憶が戻った瞬間にこの場所……廃墟の中へと飛ばされてしまった。

何が起ったのか、全くわからない。

「どうやら、アミイちゃんが記憶を取り戻したことが原因で、その空間まで飛ばされしまったようだね」

「そんなこと、あるんですかドクター？」

「現に起きてしまった。それ以外に考えられない」

ドクター・バースとアリシアは周囲を確認し、まだ誰も発見したところのない世界だと言う結論を導き出した。

新たな世界の発見。その話をした時に笑顔を見せていたアミイは、今は……震えていた。

「ここで、黒い鎧の人が現れて……突然……村の人を、全員殺して……」

背中越しだから分からないけれど、もしかしたら泣いているのかもしれない。

どうしていいか分からず、それでも何か声をかけようとして手を伸ばした。

つもりだった。

俺の身体は動かず、手も出せていない。

理由は分からないけれど、今のアミイに声をかけるのが恐かった。

そんな風に躊躇していると、俺の隣を素通りしてゼロスがアミイの隣に座った。

「家族は？」

「……お兄ちゃんが一人……」

「大切な人は？」

「……お兄ちゃんの親友の…… クレス……さん……」

「他には……誰が？」

「……教会の奉仕活動で良くしてくれたおばさん…… お兄ちゃんがお世話になってた狩猟隊の皆さん……」

「死んだのか？」

「……お兄ちゃんとクレスさんは……村の外に居たから……分らないです」

ゼロスは、あえてアミイの傷を抉るようなことばかりを聞いていた。ミラはそれを止めようとしたのか、一歩前に出た。

しかし、ドクター・バースがそれを制した。

どうやら、今ゼロスがやっていることは何か意味があることのようにだ。

俺も、黙って二人の会話を聞いていた。

「じゃあきつと、その二人がアミイちゃんを吊ってくれた筈だ。この墓を立てたのは、きつとその二人さ」

「……お兄ちゃんたちだって……殺されたかも……」

「その二人は、そんなに弱かったのか？」

「強いです！ 二人は、村で一番強いコンビだったもん！」

「……そうかい」

アミイの声が、段々熱を帯び始めた。

それでも、ゼロスがアミイに語りかける声は優しいままだ。

「でも、でも！ あの黒い騎士の人……凄く強かった！ ミゲールさんも、敵わなかった……！」

アミイは立ち上がり、自分の墓だろうと思われるその十字架を引っこ抜いた。

背中からでも伝わる、小さな女の子とは思えないほど強い殺気。

よほど、と言う言葉で表せないくらい悔しいんだろう。

「許せない……ミゲールさん、マリアさん、村の皆、お兄ちゃん、クレスさん……仇は必ず……！」

「アミイちゃん……」

ゼロスも立ち上がるが、アミイに話し掛けようとしなない。

何も言わないのは、もしかしたら自分と重ね合わせているのかもしれない。

以前聞いた話によると、ゼロスは既に記憶を取り戻していると言う。ゼロスも、記憶を取り戻した直後は殺した相手を恨んだのだろうか。それとも……

「ようやく開いたか」

突如、男の声が聞こえた。

声の方を振り返ると、半壊した教会の扉から鎧を着た銀髪の男が出てきていた。

教会を見る限り、扉のある正面以外は崩れていて隠れるスペースなど無い様にみえる。

となると、あの扉は……

「^{ホール}穴か……何者だ、お前達」

ミラが俺達の前に立ち、剣を構えた。

すると、銀髪の男の背後から更にぞろぞろと鎧の男が出てくる。

あんな大量の鎧を用意できる勢力は、このヘルでも一つしか無い。

「私は騎士団のアレクセイ。逸早くこの穴を発見し、監視をしていた」

「極秘に、か？ 騎士団のやり方は気に食わないな」

漆黒の翼も騎士団も、”上”を目指す為に結成された集団だ。

両者の決定的な違いは、情報公開の制度にある。

漆黒の翼は新たな穴が発見されたら直ぐにでも知らせを出す。

住人全員で、上を目指そう。漆黒の翼はその筆頭に立つ。と言う姿勢を取っている。

だが、騎士団は違う。

全ての穴は騎士団が管理する、新たな穴が見つかったら調査をする。実際、騎士団が完全に隔離している穴もあり出入りが出来ない区画があったりする。

情報を独占しようと言う魂胆なのだろう。

これが元で、漆黒の翼と騎士団は争っている。

「全く……大人しくカレギア城に居てくれればこんな時間は掛からなかったのだがな」

「……何？」

アレクセイの言葉は、アミイとダオスに向けられたものだった。ダオスは視線を鋭くして、アレクセイに歩み寄る。

「私とアミイを城に監禁したのは、お前か」

「監禁とは人聞きが悪い。私は倒れていた君らを保護したのだよ」

「保護だと……？」

「そうだ。こんな世界だ、誰が自分を恨んでいるのか、誰が自分の仇なのか分からない状況なのだから」

アレクセイは、さも当然のことをしたと言わんばかりの態度だった。そんな理由でダオスたちを閉じ込めたのか。

そう言いたくて仕方が無い俺は、アレクセイの方を向いて拳を握り締めた。

その時だった。アミイが、走った。

「この世界に居るのは……殺された私と！」

「アミイ!？」

アミイは木の十字架を水平に構え、アレクセイの隣に立つ鎧の男に

……

いや、黒い鎧の男に突き立てた。

「私を殺した……あなた！」

木の十字架は黒い鎧に弾かれ、アミイは地面に倒れ泥に塗れる。

黒い騎士の男は倒れたアミイに手を伸ばすが、ダオスが素早く近づきアミイと木の十字架を抱えて退いた。

「何か勘違いをしているのでは無いか……？ 俺は数日前、アレクセイ様に助けられ、以来騎士団でお世話になっているマルスと言う者だ」

「勘違い……！？ そんな訳、無い……！」

ダオスに抱えられたアミイは、土で汚れ涙で湿った怒りの表情をマルスに向けていた。

あんなアミイは、見たくない。

「アミイ」

「止めないで、ダオスさん……！ 私……！」

「私も共に戦って良いか？」

「……え？」

ダオスはアミイを地面に立たせ、木の十字架を手渡した。

ダオスも、アミイの復讐を許そうと思える何かがあるのだろうか。でも、そんなの駄目だ！

「ま、待て待て！ 戦うのは無謀だろ、数が違う！」

「そこの人相の悪い男の言う通りだ。素直にこちらに来てもらおう」

「誰が人相悪いだとかこのクロスケが！ 一片顔見せろやどんな顔でも大爆笑間違いないのあだ名つけて一生笑ってやるぜ！」

「お前まで熱くなるな、バット」

ミラに制され、俺は一步身を引く。

すると、アリシアが袖を引いてきた。

「反対側の堀に、崩れてる場所があります。鎧を着てるあの人達は通れないと思いますよ」

「おお、名案だそれ」

俺は塀の方を向き、ダオスとアミイに向かって声をかける。

「今戦つてもまた死ぬぞ！　ダオス、今は退こう！」

振り返ったダオスがこちらを見たのを確認したら、俺は全力で走り始めた。

アミイの叫び声や、元気の無いゼロスのことも気に掛かるけれど、今は先ず逃げなければ殺されてしまう。

まあ、一番の心配は……

「ひい、ひい……」

「ドクター、しっかり」

ドクター・バースが走り切れるかどうかかな……

つづく

第七話 アミィの過去とアレクセイ騎士団長（後書き）

ドーも、眠いです。

今回登場のキャラは

アレクセイ

でした！。

さてさて、瞼が落ちそうなほど眠いので今日はもう寝ます……
寝オチなう。

第八話 雑談とディバイン・ジャッジメントと（前書き）

今回から「- P U S H S E L E C T -」と言うコーナーを設けました。

あれです。チャットのようなものです。

ストーリー中に思いついた雑談を入れていこうと思います。

第八話 雑談とディバイン・ジャッジメントと

- フィールド移動 -

騎士団の居るトーティスの村から出て、更に南に向かって走る。戦闘を全く予想していなかった俺達はロクな装備を持っていない。騎士団から逃げ切り、この階層から脱出してどこかの支部に行ければいいんだけど……

殺気だったアミイも心配だけれど、まずは俺達が生き残らなきゃな。

- PUSH SELECT -

【アミイの殺気】

アミイ「はー……はー……」

ダオス「アミイ、落ち着くんだ。ここに敵は居ない」

アミイ「で、でも、お兄ちゃんを殺した人が近くに居るのに……」

ダオス「例えそうだとしても、そのように殺気立っているのは疲れてしまっただろう。いざと言う時の為に、今は肩の力を抜け」

アミイ「……」

バット「大丈夫だアミイちゃん！ いざとなったら俺が仇を討つぜ！？」

ミラ「バットでは無理だな」

ゼロス「ああ。無理だな」

アリシア「やめた方がいいですよ」

バース「無理はしない方が良い」

バット「酷っ！？ 流石にこの流れだったらフォローしたり俺も手伝うぜ的なノリじゃないの！？」

アミィ「ば、バットさん……その……お気持ちは嬉しいんですが、命は大事にしたほうが……」
バット「俺が戦う」死亡確定！？ アミィちゃんに言われたら流石に俺も泣いちゃうよ！？」

一同「（笑）」

ダオス「……アミィの肩の力が抜けた……礼を言うぞ、バット」
バット「なーに言ってるんだダオス。あんなアミィ、見たくねーって気持ちは、皆同じだろ。どうだ。俺カツコイイか？」
ダオス「ノーコメントだ」

- P U S H S E L E C T -

【ゼロスとアリシア】

バット「ゼロスとアリシアって、ずっとあの屋敷に住んでたのか？」
ゼロス「そーそー。もうラブラブでさー」

アリシア「嘘言わないでください。私がああ屋敷に来たのは2日前です」

バット「え、そうなの？」

アリシア「はい。それまでは”アルタミラ”って言う街で活動してたんです」

バット「そこでもメイドを？」

アリシア「ええ」

ゼロス「アリシアちゃんはシルヴァラント・テセアラ世界では有名なメイドさんなんだぜー？」

アリシア「た、ただ他の人よりちょっと頑張ってるだけですよ」

バット「へえ。じゃあ俺にも奉仕してもらおうかな？ ぐへへへ」

ゼロス「んじゃ俺様もお願いしちやあつかなーでひゃひゃひゃ」
アリシア「ではご主人様達。一列に並んで歯を食いしばって下さいませ？」

バット・ゼロス「すみませんでした」

- P U S H S E L E C T -

【バースの治療】

バット「そういやドクター。アミイに何したんだ？」

バース「ん？ 記憶を思い出させたことかい？」

バット「そうそう。今までも何人かドクターの治療で記憶を取り戻した奴が居たけど、治療方法は知らないから」

バース「ふむ……」

ゼロス「……」

バット「ん？ いきなり黙り込んでどうしたんだゼロス？」

ゼロス「いや……聞かない方が良いと思うぞ？」

バット「へ？」

バース「そうだな。無意味に混乱させるのも忍びない」

バット「え？ え？」

ゼロス「アミイちゃんにも、聞かないでおいでやってくれよ」

バット「よ、余計に気になってきた……」

- P U S H S E L E C T -

【トーティスの村】

アリシア「……」

ミラ「アリシア、どうかしたか？」

アリシア「えつとね……あのトーティスの村つて所……何か、ミズホの里に似てる気がして……」

ミラ「似てる……？　里には木造の建築物しか無いが、あの村には石造りの建物もあったぞ」

アリシア「あ、ううん。建物の感じとかじゃなくて……何と云うか、地形と云うか。空気と云うか」

ミラ「ふむ……？」

アリシア「ご、ごめんね。ヘンなこと言っちゃって」

ミラ「いや……確かに、言われて見ればこの辺りの景色にも見覚えがある」

アリシア「え、本当？」

ミラ「ああ……だが、何か変だ」

アリシア「うん。うまく言えないけど、何か変……」

ミラ「まるで数千年程違う時間に居るような感じた」

アリシア「うーん……本当に不思議な感じ」

南の森　- 入口 -

「ここまで来れば大丈夫かな……？」

トーティスの村から南に走った所にあつた森に逃げ込んだ俺達は、大木の陰に隠れていた。

騎士団は未だに追ってきていて、油断を許さない状況だが……それに、アミイもそろそろ限界だ。

「はあっ……はあっ……す、すみません……はっ……」

「無理をするな」

兄の仇を前にして怒りに我を忘れ、逃げるために走った。
気力も体力も限界だろう。

どうにかして、休める場所を探さなければ……

「居たぞー！」

男の声と共に、複数の足跡が近づいてきた。

大木の陰から見てみると、黒騎士の両脇に居た甲冑の男が15人ほどでこちらに走ってきていた。

不味い、見つかった。

このままだと、全員捕まる……せつかく城から逃げ出してきたアミイとダオス。

ここで捕まれば、再び監禁されるか、もしかしたら殺されるかもしれない。

そう考えた時、俺は飛び出していた。

アミイもダオスも、守らないと駄目だ。俺が囷になって……

「お前は休んでいる。息が上がっているぞ」

「う、っわっ……！？」

「でひゃひゃ」

「アミイを頼む」

飛び出した俺を押し戻したのは、ミラだった。

それに続くように、ゼロスとダオスが飛び出す。

ミラは剣、ゼロスは短剣。ダオスは拳を構え、甲冑の男たちと戦い始めた。

俺はその戦いっぷりを、みっともなく口をあけて見ていた。
その横を、よろよろのアミイが走り去る。

「うわああああ！」

「ちょ、ちょお待てアミィ!?」

俺は慌ててアミィを抱きかかえ、草むらに下がる。

アミィは手足をじたばたとさせて……と言つか振りほどこうと俺を攻撃して来た。

うごっ……裏拳が顔面ヒット。痛い……

「離してっ……下さい！ 離して……離せえ！」

「アミィ！ 落ち着け、アミィ！」

暴れまわるアミィ。数分前までは……笑顔の耐えない少女だったのに……

自分の”死”の記憶を思い出した途端、別人になったみたいだ。

もし、俺の記憶も、アミィのような記憶だったら……こんな風になつて、立ち直れなくなるんだろうか……

＊

森の中、迫ってきた騎士団に斬りかかったミラ、ゼロス、ダオス。騎士団たちは慌てることなく剣と盾を構え、応戦を始めた。

「>閃空裂破<！」

ゼロスの短剣が甲冑の男を捕らえ、斬撃と共に空中に放り出す。が、重量級の敵であつた為か思つたよりも距離を稼げていない。

複数の敵を相手に立ち回りをしているため、大技の後にある程度の距離を稼がないと間が空かない。

休み無く戦えば、直ぐにスタミナが切れてしまう。

「覚悟しろ！」

正面の敵に気を取られていたゼロスは、背後から近づいてきた小柄の騎士に気が付かなかった。

既に振りかぶられた剣がゼロスの背中を確実に捕らえている。

「ちっ……！」

「>ウインドカッター<！」

「ぐあ！？」

ゼロスのピンチを見つけたミラが魔技を放ち、騎士を弾き飛ばす。間一髪のところを助けられたゼロスはミラの元に走りより、背中を合わせる形になった。

「サンキュー、ミラちゃん。俺様感動したぜ」

「礼は、こいつらを倒すことで返してくれ」

「了解つと……おいイケメン！ こっちこい！」

ゼロスは、魔法と格闘を使い分けて騎士の相手をしていたダオスを呼び寄せた。

3人はそれぞれ大技を繰り出し、騎士たちから距離を取りつつ集まる。

騎士と3人の距離が大きく開き、お互いが反撃に備えて武器を構える。

すると、両者3メートルほど間を空けた状態で硬直した。

この硬直を待っていたとばかりに、ゼロスは剣を鞘に収めて詠唱に

入る準備をした。

「今からちよいと大技使うわ。少し俺を守ってくんねえか？」

「……ゼロスと言ったか」

「何だ？」

ダオスはゼロスの方を見ず、ただ言葉を紡ぐ。

「アミイが記憶を取り戻した時……それに共感するような素振りを
見せたな」

「それが、どした？」

「……お前はもう記憶を取り戻しているのか？」

「ああ」

「……アミイは、兄弟や想い人と死に別れる過去を持っていた」

「……何が言いたい？」

「この世界に来る者は……皆、そのような過去を持っているのか？」

その質問は、ゼロスに……と言うより、自分にしているようだった。
ゼロスはその質問に対して、乾いた笑いを一つ返した。

「ひゃっひゃ、俺様の過去はアミイちゃんほど絶望的じゃねーよ」

「ゼロス……」

「いーんだミラちゃん。俺様は……仲間を裏切って、その報復で殺
されたんだよ」

「裏切った……？」

「でも、死ぬまで俺のことを見ていてくれたし……死んだ後の約束
も守ってくれたよ」

裏切り、報復されたと言う割りにゼロスの表情は穏やかだった。
何か満足したような、それでいて悔しそうな表情。

「俺様は、いい仲間に出会って、そして最低な死に方をしたよ」

「……ゼロス、そろそろ」

「ああ。詠唱始めるぜ」

「了解した」

「任せろ」

序々に距離を縮めてきていた騎士たちを退けるため、ミラとダオスはゼロスの周囲に展開した。

それをきっかけに、騎士達は勢いを増して襲い掛かる。

「輝く御名の許　地を這う穢れし魂に　裁きの光を雨と降らせん」

ゼロスの詠唱が森の中に響く。

騎士達の怒号にも、剣撃の音にも掻き消されることなく遠く遠くまで響き渡る。

「安息に眠れ」

詠唱が後半に差し掛かり、突然空が光り出す。まるで、ゼロスの声が天に届いたかのような。

「罪深きものよ」

ゼロスの背中から、二枚の光翼が姿を現す。

神秘的で、神々しくて、けれどどこか罪深い……虹色の羽。一度、二度。

羽ばたく度に森が揺れ、木々が軋み、そして突風が吹き荒れた。

「させるかぁ！」

「しまった……！」

ゼロスの詠唱を阻止すべく、一人の騎士がミラを突破してゼロスに近づく。

騎士は剣を突き出し、ゼロスを狙う。

それに気が付いたゼロスは、詠唱を止めることなく己の力を解放した。

>オーバールIMIT<

「ぐうつ！？」

ゼロスを中心に衝撃波が生じ、騎士を弾き飛ばす。

その隙に、ゼロスは飛び上がった。

天から巨大な光柱が降り注ぎ、ゼロスを包み込む。

光を受けたゼロスは、まるで天使の如き振る舞いで天を泳ぐ。

「俺さまの本気、みせてやるよ……食らいな！」

>デイベイン・ジャツジメント<

ゼロスが放った言葉に呼応するように、光柱が肥大して騎士達を包み込んでいく。

光に包まれた騎士は、一瞬のうちに力尽きた。

*

「終わったのか……？」

突然、光に包まれたゼロス達。

木の陰に隠れてアミイを押さえていた俺とアリシアとバーズは、何が起こったのか分からず呆然としていた。

「おい、アリシアちゃん。アミイちゃん」

「ゼロス！ 無事だったか！ てっきり死んだかと……」
「おいおい、勝手に殺すなよ」

木の陰を出て見てみると、ゼロスが肩で息をしている以外に3人に変わった様子は無い。

良かった。本当に。

「ゼロスだけ息切れしてるな。あれか？ 足引つ張ったか？」

「んだとお！？ 俺様のお陰で勝ったようなモンだったんだぞ！」

「へーだいかつやくだったんですねー」

「アリシアちゃん棒読みだよ！？ 俺様傷つくよ！？」

騎士達を振り返ちにして、盛り上がる一行。

「そこに居るのは誰だ！」

突然、背後から声。

聞き覚えの無い男の声に慌てて振り返ると、そこには仮面を被った男が立っていた。

u
u
<

第八話 雑談とディバイン・ジャッジメントと（後書き）

読んでくれてありがとう、諸君！

今回はゼロスTUEEEの回だったね！

ゼロス好きな人も、毎回殺してた人も、満足してくれたかな？

今回は新登場のキャラはいないけど、最後に出てきた仮面の男もテイルズのキャラだよ。紹介は次回にて。

第九話 エトスハウスにいらっしやい（前書き）

戦闘終了後の休息、ですね。

さて、仮面の男の正体とは！？

まあテイルズファンなら分かるでしょうが。

第九話 エトスハウスにいらっしやい

南の森 - 大木前の広場 -

騎士団を打ち倒した俺達の前に現れたのは、仮面の男。
怪しい。

主に仮面の部分が怪しい。
と言うか先ず仮面が怪しい。

戦闘が終了した直後に現れたところとか。あと仮面が怪しい。
森の中なのに汚れてない軍服着てる所とか。あと仮面が怪しい。
腰には半透明で光を放つ謎の剣を備えている。あと仮面が怪しい。
と言うかこんな糞視界のわるい森の中を仮面つけて歩いてる時点で怪しい。あと仮面が怪しい。

仮面キャラの正体は大抵が兄弟か父親かクローンか生まれ変わりだ。
あと仮面が怪しい。

前作で死亡扱いになってるキャラと髪の色が一緒だと大抵そのキャラ。あと仮面が怪しい。

仮面キャラの中身は十中八九イケメンだから、仮面を外したら怪しいイケメンになるな。でも仮面が怪しい。

「誰だお前は！」

「それはこちらのセリフだ。貴様ら、ユグドラシルの前で何をしている？」

「……ゆぐどらしる？」

「貴様らの背後にある大樹のことだ」

仮面の男の言葉に、俺達は背後の大樹を見上げた。

そこには、生命力に満ち溢れ緑の葉が生い茂る大樹があった。

大樹は日光を葉の間から降り注がせ、周囲を神秘的な空間にしてい

た。

どこかに女神でも居そうな空間だな。

「この大樹は……！」

「知っているのかダオス!?」

「いや……気のせい……か……」

ダオスの意味ありげな呟きに、つい過剰に反応してしまった。でも、他の皆も特に何か反応してるわけじゃない。つてことは、特に俺らに關係する話じゃないってことかな。

「誤解だ仮面の人。俺たちちよいとこの森に逃げ込んできたただぜ」

「逃げ込んで……? 貴様ら、悪人か?」

仮面の男は腰に備えていた半透明の剣を引き抜いた。

「ちよちよちよつと待てえ! 戦うのはやめよう! 俺達はお前ほど怪しくない!」

「バットさん、何を口走ってるんですかアホですか」

「はっ、し、しまった、つい本音がポロリと」

仮面の男は俺らの間抜けな会話にも眉一つ動かさず、剣を構えている。

こりゃヤバイか……?

ミラなんか柄に手を掛けてるし、ゼロスとダオスも視線が鋭い。このままだとまた戦闘に……

「おいディオス。何の音だったんだー?」

「ディオ……来るなと言ったのに」

ディオスと呼ばれた仮面の男の背後から、銀髪の男の子が出てきた。股下が極端に長いズボンが特徴的だ。

「何だこいつら？ どっから来たんだ？」

「お、俺たちや騎士団に理不尽な攻撃を受けて逃げてきたんだ」
「騎士団……だと？」

「へ、へえ。そうでございますディオス様」

「……お前達、騎士団に敵対する者か」

思いつきり下手に出てみたが、どうにも効果は無い様子。くそう。しかし、興味を持ってくれたみたいだ。この世界から脱出する方法を知っているかもしれない。

「俺らは”漆黒の翼”って団体だ」

「漆黒の……そうか。メルティアの仲間か」

「メルティア……？」

俺はどこかでその名前を聞いた覚えがある。記憶をたどり、僅かだが残った記憶を元にメルティアと言う人物を思い出す。

「ああ！ あのちょっとカール掛かった髪の色っぽいお姉さんか！」

「貴様……メルティアに手を出してないだろうな？」

「だ、出してません出してません！？」

いつの間にか目の前に居たディオスに剣を突きつけられる俺。確かにエロいし美人さんだったけど性格キツくて近づけなかったもん！

「……バット。別の騎士団が近づいてきている」
「え、マジで!？」

ダオスが指差した方向、遙か彼方に鎧らしき物が見えた。
幸い、向こうはこちらに気が付かず茂みの奥へと消えたが、こちらに来るのも時間の問題だろう。

「や、やばいじゃん……ここいらに隠れられる所は……!」
「待て。ここで戦闘にでもなったら、大樹に被害が及ぶ」
「困ってるんだろ? こっち付いて来いよ、避難させてやる」

ディオとディオスは、ディオが出てきた方向に向かった。
俺らもその後を付いていくと……そこには破れたカンバスがあった。

「何だこれ?」
「入るぞ」

ディオとディオスは、そのカンバスを踏みつける。
同時に、二人の姿が光になって吸い込まれた。

「これ、穴か……!」

人を別の階層に移動させる穴。
普通は扉などになっていて入り口と出口が見えるようになっていて。
だからこそ、扉の向こうとこちら側景色が全く違うと言う現象が起こる。

けれど、このようにワープするようなタイプもあるのかもしれない。
と言うか、それ以外にこの現象を説明できない。

「入るしかないか……皆」

「ああ、入ろう。ここに居ても追いつかれるだけだ。それに……」

ミラは後ろで俯くアミイを見た。

確かに、こんな状態のアミイをこのままにしておけない。

*

穴を抜けると、そこには一軒の家が建っていた。

家の脇には牧場らしきものがあって、そこには大量のモンスターが……いたけど、何かすつごく大人しい。

「ここはエトスハウス。まあ、ゆっくりしてけよ」

「サンキューなディオ！ デイオスだけじゃ話すら出来なくてよ！」

「ま、まあデイオスは愛想が無いからな。俺に任せとけよ」

「どうでも良いが、ここだって安全では無い。穴は塞げないのだからな」

確かに、デイオスの言う通りだ。発見される時間が延長されただけ、と考えるのが妥当か。

「とりあえずアミイを休ませたいんだよな……家中、貸してもらっていいか？」

「ああ、構わねーぜ。案内するよ」

俺はダオスとゼロスがアミイを連れ、ディオとバースに先導されてエトスハウスとやらに入っていくのを見届けた。

何と言うか、俺が行くのも場違いな気がするんだよな。

- P U S H S E L E C T -

【役立た・S】

アリシア「バットさん。私達に出来ることって……無いんですかね？」

バット「え？」

アリシア「私、戦えないので……皆さんの為になることをしたいんですけど……」

バット「お、俺に相談すんなよ。俺だって戦えないんだから」

アリシア「ですよー」

バット「ぐう、傷ついたぞ」

アリシア「……でも、バットさんはその強力なキャラクターでどうなってますから……」

バット「なってねえよ！」

- P U S H S E L E C T -

【ディオスとディオ】

バット「ディオス、いつまで仮面被ってるんだ？」

ディオス「貴様らが居なくなるまでだ」

アリシア「えー、もういいじゃないですか。敵じゃないんですから」

ディオス「……それでもだ」

バット「なんでえ。本当に愛想が無いな」

ディオス「……貴様らも早く家に入れ。戦いには参加していません」

たようだが、疲れているだろう」

バット「一人で穴の監視してくれてる奴放っておけないっしょ」

ディオス「余計なお世話だ」

アリシア「まあまあ。ディオスさんが休むまで、私達も付き合いま
すから」

ディオス「……」

つづく

第九話 エトスハウスにいらっしやい（後書き）

読んでくれてありが豆腐（笑）

すてきなステーキ（爆）

ってことで（どういうことだってばよ）、今回の新キャラは

ディオ

ディオス・バンディ

でしたー。

なりダンXはテイルズとしては番外っぽい扱いだけど、ディオスが好きだから出しちゃったぜ

第十話 ぼくらのじくうせんし（前書き）

つよいぞ！ ぼくらの じくうせんし！

月刊ファンタジア、毎月15日発売！

はい、悪ふざけタイトルすいませんでした。

第十話 ぼくらのじくうせんし

エトスハウス - 居間 -

バースとアリシアがアミイを休ませている間、他のメンバーで今後のことを話し合うことになった。

ディオに聞いた限り、ここは例のトーティス村から随分と離れているけれど同じ世界の中にあるらしい。

「お前達を通ってきた”門”については俺も知らん」

「俺達が知ってるのは、さっきの森から山一つ越えた先にあるアルヴァニスタの都にある”穴”だけだぜ」

騎士団が使っていたトーティスの村の穴は、存在すら知らなかったと言うディオ達。

もしかしたら、騎士団たちが何かしたことによって新しく開いた穴なのかもしれない。

穴が人工的に生成できるって言う話は聞いたことないけれど、それは今は置いておこう。

「この後だけど……どうしたらいいと思う？」

「俺は、トーティスの村の穴が気になるな」

「ゼロス……でも、きっと騎士団の奴らが管理してるぜ？」

「ああ。けど、放つても置けないだろ」

「そうだな……二手に分かれるか？」

ミラが提案したのは、戦闘メンバーのみで構成されたチームと、最低限の戦力を残した非戦闘員を守るチームに分かれて行動すること。騎士団に占拠されているであろう穴を開放するチームと、その間に

安全な場所に移るチーム。
うまく行けば、この世界での新たな支部を見つけておくことも出来る。

「ディオス。そのアルヴァニスタの都とやらまで歩くには、どれくらい時間が掛かる？」

「ミラと言ったか……先ず、歩いて行くのは止めたほうが良い」

「それは、私の足では山を登りきれない……と言ったことか？」

ミラの足には、医療ジンテクスと呼ばれる装置が装備されている。それが無ければ歩くことが出来ないらしく、寝る時や休息時、時折外しているのを見かけたことがある。
どうも相等痛いらしい。

「いや。山を登るよりも、港まで行った方が早い」

「港？」

「トーティスの村より北東に進んだ所に港がある。しかし、ここには定期船が無い」

「定期船が無い？」

「アルヴァニスタの都から来る人間が居る時のみ、この港は利用される。運良く居合わせられれば乗せてもらえるだろうが……」

「そんな来るかどーかもわかんねー船を頼りにするのはご免だぜえ？」

「確かに……他に方法は？」

「……トーティスの村を通り抜けることになるが、ここより西にある老人の住む家がある。そこに”空を飛ぶ機械”が置かれている」

「空を飛ぶ……？　ワイバーンなどの生物ではなく、か？」

「名を”レアバード”と言う」

ディオスからの情報で、非戦闘要員中心のチームの行き先が西の老

人の家に定まった。

そこでレアバードつてのを借りてアルヴァニスタの都つて所の穴まで行く。

その穴なら確実に使えるらしいし、知ってる世界に出られるはずだ。漆黒の翼の支部まで行ければ安心できる。

「……アレがここにもあるのか……」

「ん？ どうしたゼロス？」

「いや、何でもねーよ。でひゃひゃひゃ」

レアバードの話をしてから、ゼロスの様子がおかしい。

何か思うところがあるんだろうか。

「ところで……非戦闘要員チームに付く”最低限の戦力”って誰だ？」

戦闘が出来るのは、ミラ・ゼロス・ダオス。

対して戦闘が出来ないのは、俺・アミイ・アリシア・バース。

戦闘メンバーから一人抜くと、2人になってしまう。

トーティスの村前に展開しているであろう部隊のところまでは一緒だから3人で戦えるとしても、その先は不安だ。

「だが、他に手は無い」

「穴の向こうが平和であることを祈るしか無いっしょー」

ミラの頑固な所とゼロスの適当な所がいい具合に危険な状況を作り出そうとしている。

せめて、ダオスに付いてってもらいたいけど……そうなると俺ら非戦闘要員が不安だ。

「何なら、俺が付いてつてもいいぜ？ 久しぶりにメルティアにも会いてーし」

「気持ちはあるがたいが……」

「おっと。俺をただの子供だと思ふなよ。俺はすっげー強いぜ？」

ディオはタンスの中に入っていた鎧を取り出して一瞬で着替えた。テーブルの上にさっきまで着てた服が畳んでおいてある。な、なんて早業だ。脱いだ瞬間すら見えなかったぜ。

「……ならば、頼もうか」

「おいおいミラちゃん、あんまし一般人を巻き込むのは良くねーぜ？」

「だが、猫の手も借りたいのは事実。少しでも動ける人員を確保したい」

「なら、俺が西の家まで送り届けてやろう」

「そりゃ助かるね。世話掛けるわ」

ゼロスの軽口に、ディオスは軽く頷いて家を出て行った。たぶん、穴を見張つてくれるんだろう。

愛想が無いけど、凄くいい奴なのかも。

これで会議も終了か、とゼロスが締めとばかりに立ち上がる。その時、ダオスが動いた。

「どうした、ダオス」

「ゼロス、ミラ。少し我俣を言っついていいだろうか？」

「何だいイケメン？」

「……私は、このままこの世界を見て回りたい。非戦闘要員を守る部隊に入れてもらえないだろうか」

「え？ また何でだ？」

「この世界はアミイの世界だった……共に捕まっていた私はアミイ

「関係がある可能性がある。もっと見て周りたい」

確かに、騎士団の奴らも何か意味深なことを言ってたし……その可能性はあるな。

俺も賛成だ。ダオスが来てくれるなら心強い。

「良いだろう。だが、トーティスの村の穴を開放する所までは手伝ってもらうぞ」

「了解した」

仕方ないとは言え、ミラは人使いが荒いなあ。

「バット、お前も出来る限り手伝え。剣くらい扱えるだろう」

「おいおい、ホント人使い荒いな。ってか俺に死ねってか」

「そうならぬよう、私が守ってやる」

「やだ、イケメン……惚れるわぁ」

「い、イケメンか……美女と言ってくれた方が嬉しいのだが」

イケメン美女ミラ様は照れた表情で椅子に持たれかかる。

うふふ、照れ顔も可愛いだよ。

「だーいじょーぶだって。誰もバットと進んで戦おうとする奴なんて居ないからさ」

「それは俺の顔の話なのか？俺の顔が悪人面だから皆避けるってそういう表現か？」

「さーて、俺様もう寝ようかなー。明日は忙しくなりそうだし」

ゼロスはわざとらしくディオにあてがわれた部屋に入って行った。くそう、ゼロスもダオスも、イケメン面だよなあ……ディオも可愛い系だし。ぐすん。

*

エトスハウスの、窓際の部屋。

二つ並んで置かれてるベッドに座っているのは、アミイだった。小さな身体を更に小さくするように体育座りをしていた。

ベッドの下の方には、アリシアが小さく寝息を立てていた。近くの椅子では、ドクター・バースが座ったまま眠っている。

「お、まだ起きてたか」

俺はディオと一緒にその部屋に入った。

てつきり全員寝てるかと思っていたから、ノックをしなかったのでアミイは少し驚いていた。

けど、直ぐに表情を無に戻して俯いた。

「……ディオさんは……記憶を取り戻してますか……？」

「いや。俺もディオスもまだだ」

「そうですか……」

アミイの落ち込みっぷりは半端じゃなかった。

こりゃ、本当に当分は笑顔は見れないかもな……

でも、だからって何もせずに見ていられるほど冷たい人間じゃない。

「アミイ。辛いかもしれないけど、あの黒騎士と戦うのは止めたほうがいい。アミイまで死んだら、兄さんも悲しむだろ」

「……バットさんは、記憶が無いからそんなことが言えるんです……」

「そりゃ、そうかもしれないけど……」

「……ほっといてください」

アミイのやさぐれた態度に、俺はムカついた。

チヨット前まで俺を慕ってくれたのに、何だよその態度。記憶を思い出すのを躊躇ってる俺は臆病だって言うのか？

「俺が助けなきゃ、まだ城の中に居たかもしれないのに酷い言われようだな」

その言葉に、アミイが眼を見開いた。

ベッドから飛び降りて、怒りのみをむき出しにして俺に掴みかかってきた。

「バットさんが！ 貴方が！ 私を助けたから……私に記憶を取り戻させたから！ 漆黒の翼なんか招いたから！」

「何だそれ……んじゃ思い出さなかった方が良かったって言うのかよ！」

「こんな記憶なら……いらない……いらなかった！ 思い出したくなかった！」

アミイの眼に浮かんだ涙が落ちる。

俺は何か間違っていたのか？

アミイを助けた事も。記憶を取り戻させた事も。間違ってたんだろうか。

……いや。間違ってたなんか無い。

例えばそれがアミイにとって間違いだったとしても、それをしなければ前に進めない。

アミイには、全てを知った上で進んで欲しい。
だからこそ、自分の死を乗り越えて欲しい。
仇なんかに負けないで欲しい……って、ん？

「ちよつと待て。アミイを殺したあの黒騎士……なんでここに居るんだ？」

「……え？」

「だって、”死んだ奴”だけが来る世界だぜ、ここ」

アミイが自分を殺した奴だと一瞬で判断できたと言うことは、自分を殺した時と同じ顔をしていたと言うこと。

つまり、黒騎士が死んだのはアミイを殺した直ぐ後と言うことになる。

何年も経っていれば、顔つきだって変わるだろうし。

まあ、この世界に来るときに年齢が変化するなんて後付設定がこの先追加されない限りこの説明は有効だろ。

となれば……

「あの黒騎士……アミイの兄貴達に倒されたんじゃないか？」

「……お兄ちゃんとクレスさんが……？」

「そうだよ。きっとそうさ！ アミイが殺されたのを知った兄貴達が、仇を討ってくれたんだよ！」

「……」

アミイは体操座りを崩し、ベッドから立ち上がる。

先ほどとは、明らかに表情が違った。

「で、でも……あの人を倒したのがお兄ちゃん達とは限らないし……」

「なあ。さっき”クレス”って言ったか？ それって時空戦士のク

レスのこと？」

ディオは何か思い出したように本棚に近づき、一冊の本を手取る。それは、恐らくこの世界の歴史をまとめたであろう本だった。タイトルは”幻想交響曲”。

「ここに出てくる、時空を越えて戦った戦士達って中に……ほら

ディオが見せたのは、本の後半の方に乗ってる”魔王と戦った戦士”と言う項目だった。

御伽噺か何かの本にしか見えないが、先ほど見せてもらった世界地図と同じ地図が記されている。

トーティスの村もあったし、この森のことも書いてある。

と言うか……アミイが言ってた”トーティスの村が襲われた”ことが記してあった。

そこに書いてあった時空戦士は、全部で6人。

クレス・アルベイン

ミント・アドネード

クラス・F・レスター

アーチェ・クライン

チェスター・バークライト

藤林すず

「……クレスさんと……お兄ちゃん……！」

「すげーな、アミイの兄ちゃん達。時空戦士だぜ！」

ディオのお陰で、アミイの兄貴も、想い人も無事で、更には世界まで救ったことが判明した。

これ以上驚くことがあるだろうか。そして、嬉しいことがあるだろうか。

死に別れてしまった家族が、世界まで救っていた。

「良かった……！ お兄ちゃんは…… クレスさんは…… 生きてた……！」

アミイが、笑った。

自分の死を知ってからさほど時間は経っていないのに、随分と長いことアミイの笑顔を見ていなかった気がする。

……これで、俺は俺がしたことに自信を持てる。
アミイを助けた事も、記憶を取り戻させた事も、間違っていないかったって…… 信じられる。

「……でも、待てよ？ 何でアミイの兄貴達のがもう本になってるんだ？ ここはアミイが死んでから何年後かの世界なのか？」
「いや、違うみてーなんだ。村とか城の場所は歴史書の通りなんだけど、人が居ないんだよな」
「あ…… やっぱり、ここもか」

今までの世界でも、無人の街から歴史書が発見されることはあったけど、ここと同様、歴史上に出てくる人物は見つからない。

そもそも、今が何年なのか全く分からないからな…… とんでもなく未来、って訳でも無さそうだし。

もし人類が絶滅するほど未来なんだとしたら、建物が原型を保ってるはずが無いし。

「…… 本当、何なんだこの世界は」

”ヘル”の謎を解くことが、もしかしたら脱出に繋がるかもしれない。

実際、そういう方向に特化した組織もある。

アミィのように、自分の記憶に苦しめられ続ける人も少なくない……
俺は……記憶を思い出したほうがいいんだろうか……

つづく

第十話 ぼくらのじくうせんし（後書き）

今回でアミィ復活です。

……もうちょっとやさぐれアミィ書きたかった気もするけど、話が進まないからね。

ってことで今回は新キャラなしです。

が、次回はテンコ盛りに増やすつもりです。

第十一話 登場！ バルバトスとネビリムとザギとハスタ！（前書き）

タイトル通り。今回は色々と準備回です。

第十一話 登場！ バルバトスとネビリムとザギとハスタ！

エトスハウス - 居間 -

朝、目覚めたらいい匂いが家の中に立ち込めていた。

二度寝する気にもならず、俺はディオから借りた毛布から出ると、居間に向かった。

そこでは、アミイが朝食を振舞ってくれていた。

- P U S H S E L E C T -

【明るいアミイ】

アミイ「皆さん、朝食作りました！ どうぞ食べて下さい！」

ゼロス「おー、アミイちゃん復活かい？」

ミラ「立ち直ったのだな」

アミイ「ご迷惑お掛けしました。でも、もう大丈夫です！」

バース「それは何より。ところで、これは何かな？」

アミイ「バークライト家秘伝の料理、マーボーカレーです！」

ディオ「う、うめえ！ むちゃくちゃうめえ！」

ディオス「……（ガシャツ、ガシャツ）」

アミイ「ディ、ディオスさん…… 食事中くらい仮面は外したほうが

……」

ディオス「……いや……このままでいい……」

アミイ「でも……」

ディオ「ほっときゃいーって、ディオスのことは」

アリシア「食べずらそうですね……それにしても、これ本当に美味しい」

ミラ「うむ……むぐむぐ……うまいな……もぐもぐ……」

バット「おいミラ、食いしん坊はいーけど腹壊すなよ？　これから戦闘するんだぜ？」

ミラ「大丈夫だ、問題は無い」

バット「死亡フラグ乙」

- P U S H S E L E C T -

【ダオスとアミイ】

アミイ「はい、ダオスさんも」

ダオス「ああ」

アミイ「どうですか？　おいしいですか？」

ダオス「ああ」

アミイ「えへへ……」

ゼロス「ラブラブだねえ」

ミラ「……ラブラブなのか？」

アリシア「ラブラブですね！」

ディオ「らぶらぶ？　そーなのか？」

ディオス「……」

バット「ぬうらあーぶ　るうらあーぶ　だねえ！」

アミイ「ちよつ、か、からかわないでください！」

ミラ・ディオ「……？」

バース「ミラ君、ディオ君。君たちはまだ知らなくて良いんだよ」

ミラ「何か腑に落ちないな……」

ディオ「こ、子供扱いすんなよ！」

トーティスの村　入り口　- 昼 -

村の入り口から中を覗き込んでみると、昨日見た”穴”である教

会の扉の前には騎士団と思しき騎士が二人立っていた。

「今なら何とかなりそうだな」

「ゼロス、ミラ、ダオス、更にディオも居る！ これで勝つる！」

「おおっと。まだ居るぜ？」

「え？」

突然、後ろを歩いていたディオが赤いカーテンを広げて誰かに被せている。

背丈から言つて、おそらくアミイが入っているようだ。

「じゃっじゃーん！」

ばっ、とカーテンを剥ぎ取る。

そこに居たのは、白いワンピースを着て十字架を持つアミイだった。帽子を被り、大きな二つの飾りで結ばれていた髪はそのままに若干カールがかかっている。

「むっはー！ アミイちゃんかーわーいーいー！」

「ゼロス、場所を考えろ。騒ぐな」

「ディオ君、それは一体何かな？」

バースの質問、ディオが待つてましたとばかりに人差し指を立てて説明を始めた。

「俺には”なりきる力”があるっぽいんだけどさ」

「なりきる力？」

「まあ、簡単に言つと”服を着るとその服に似合った能力を使える”力だな」

「何それチート？ 主人公確定能力じゃねーか」

「バット、話の腰を折るな。それで？ アミイにはその力が無いのに何故着せた？」

「ああ。これは俺の妹の服なんだけど、服そのものに魔法を掛けておいたんだ。誰が着てもある程度の力が使えるように」

アミイは少し照れ気味だったけれど、腰が引けているような感じは無かった。

戦うための服を身にまとったと言うことは……どういうことか、ア
ミイは覚悟しているようだった。

「いいの。か。アミイ」

「はい、ミラさん！出来ることを、出来るだけ、出切る限りやります！」

「うむ。それでいい」

アミイの覚悟を確認した所で、ミラが剣を抜いた。

それが合図となり、一同に緊張が走る。

物陰から顔を出し、騎士の場所を確認。

タイミングを見計らい……一気に出……！

「ぶるあああああああああああああああああああああ

あああああああ！

突如、教会の扉がはじけ飛んで大男が数十人の騎士と共に現れた。と言ふより、大男の突進を止めようとした騎士が大男を止められず、一緒に出てきてしまったような感じた。

その大男は……！

「ば、バルバトス！？」

「何故、奴がココに……！」

「おいおい冗談じゃないぜ……何でアイフリードが居るんだよ」

バルバトスは”海賊アイフリード一味”と呼ばれる団体のメンバー。海賊アイフリード一味は”ヘルの謎を解くこと”を主目的にした団体。

この世界を理解すれば脱出は容易だ、と考えているらしいのだが……所属しているのはバルバトスのようにどこかブっとんだ奴ばかり。”どんな世界だろうと楽しめれば良い”と言うような思想の持ち主が多いらしく、謎を解くのはついで程度にしか考えていないようだ。

「バルバトス。あんまり一人で楽しまないで私にも残してよお」

「そうだぜ……強い奴は俺の得物だ……摘み食いも許さねえ」

その後ろから出てきたのは、白髪的女とピンク髪の男。

女の方は右が白、左が黒のボディースーツを着ている。いかにも悪の幹部っぽいな。

男の方は、前髪だけが金髪になっていて黒に金の縁取りがされたボディースーツ。こっちも悪の幹部っぽい。

更に、その二人に続いてもう一人男が現れた。

その男も髪の色はピンク。赤いフリル満載の上着に、革製のズボン。肩に長い槍を引っ掛けている。

「おいおい何で台所なんか繋がつてるんですか。もしかして新手の予告状ですか？」

「何を口走ってるんだハスタ……」

「ザギ。相手にしたら疲れるわよ」

「おいおいそれはあまりに酷いんじゃないですか練り練りさん」

「ネビリムよ。何よ練り練りって。二文字しかあってないじゃない」

バルバトスに続いて出てきた三人は、それぞれネビリム、ザギ、ハスタと言っらしい。

これはアレだな。

四天王にするしか無いな。

怪力のバルバトス。

色気のネビリム。

狂気のザギ。

お調子者のハスタ。

……んー、最後、語呂が悪いな。

人間狩りの男、ハスターマン！

……東映から怒られそうだな。

「しかし、これじゃ通れないな……あいつ等何しに着たんだよ……」

「もう少し様子を見よう」

四人は扉の前で話始めた。

声がかいから聞き耳を立てる必要ありませんでした。本当にありがとうございます。

「じゃあ、予定通りツールを目指しよう」

「そっちは貴様に任せた……俺は強い奴を探しに行く」

「駄目よバルバトス。貴方もアイフリードの一味でしょう」

「英雄殺しの名を持つ、この俺が倒さなければならん相手がこの世界に居ると聞いたから来たんだ……それ以外に協力する気は無い……」

……

「同感だな。俺もこの世界の謎とやらには興味かねえ」

「じゃー俺もー」

「全く、アンタ達は……トールを使えば、もっともつと強い奴らと戦えるって言うのに」

「何い……？ それを早く言え」

「おい、さつさと案内しろ」

「じゃー俺もー」

「ふふっ、それじゃあ行きましようか。先ずは……ユークリッドね」

四人は嵐の如く去って行った。

つづく

第十一話 登場！ バルバトスとネビリムとザギとハスタ！（後書き）

読んでくれてありがとう。

今回登場のキャラは言うまでも無く、

バルバトス・ゲーティア

ゲルダ・ネビリム・・・ではなくレプリカネビリム

ザギ

ハスタ・エクステルミ

でしたー。

・・・ところで、ザギって”苗字”は公開されて無いよね？

満月の子の可能性があるから・・・ザギ・シデス・ヒュラッセイン・

・・・？

まさか・・・な・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1368x/>

テイルズオブザワールド 漆黒の翼 ~ 悪人面と悪役 ~

2011年10月22日00時08分発行